明治廿七年度

水村九藏氏
養蠶傳習場

春蠶飼育日表

200891

K635
J49

競進社長木村九藏先生閲
競進社卒業生中村高樹筆記

木村九藏氏
養蠶傳習場

春蟄飼育日表

緒言

本書は明治二十七年度競進社長木村九藏氏養蠶傳習場に於ける春蠶飼育の事蹟を筆記し同志に頒たんが爲め謄寫の勞を省き印刷に附したるものにして書中編を分て前編後篇の二となし其前編に載する所は養蠶着手の前に於て氏が本業に關する注意の順序を講話せし大要を略記したるものにして後編ハ即ち教授木村しま氏の教導に從ひ前編に掲ぐる講話の順序に基き催青より上簇に至るまで實踐せしものを表記したるものなり故に本編に於ては只日々取扱ひふる概要を載せ其手術の如きは前編に於けるものと異ならざれば重複の嫌ひあるを以て之れを前編ふ讓り玆に詳記せず故に讀者宜しく前後兩編相對照せば稍其要を知るを得べし尙本書は單に筆記の儘を印刷したるもの

にして毫も文飾をなさず字句を正さず誤字或は文意の通せざる所決して尠からず之れ筆記者が不學の罪なれば讀者幸に之れを咎むるなく其要點の存する所を採て各自の養蠶に應用せらるゝを得ば筆記者の主旨之れを以て足れりとす聊緒言を述ぶると共ゐ木村九藏氏の履歷に就き豫て見聞せる概略を附記す

木村九藏氏ハ弘化二年十月十日を以て上野國綠野郡高山村に生る父を寅藏と云ひ氏ハ其第五子なり實兄に長五郎氏あり後ゑ養蠶改良高山社を興し其社長たり氏ハ幼なる時實兄長五郎氏と共に深く養蠶の業を研究し慶應三年三月埼玉縣兒玉郡新宿村木村勝五郎の遺跡と繼ぎ姓を木村と改め茲に居と定め以來專ら該業に改良を企圖し遠く古老の著書を探り各地の名家を叩き得る所を自己の養蠶ゑ折衷斟酌し累年飼育を試み其利害得失を逐究し遂に火力を利用し蠶室內の氣候を作爲し養蠶を營むの方法最も、有効なるとを發明し明治五年ゑ至り其蠶法と名

けて一派溫暖育と稱するに至れり當時近鄕其育法を見て大に危險の育法にして採るに足らずとし嘲嘲指彈するもの多し然れども氏ハ一層其育法に熱中し敢て他人の空嘴を聞かず勞身焦思愈其方法と實踐經驗し大に改良を加へ隨て蠶室の適否を考案し加ふるに桑樹の種類を撰栽し製絲の如何を試驗する等日夜孜々として爲めに衣帶を解かず寢食を忘るゝに至りゑと云ふ仝年氏ハ蠶種催青器にして冬期蠶種の貯藏器にも兼用し得らるべきものと新案製作する等一意蠶業の改良を謀る即ち其結果として年々の成蘂頗る佳良にして比隣其比を見す茲に於てか始めて其育法と信用し其練習と乞ふもの地方に起り明治七年に至る頃企望者續出す氏ハ即ち之と導き且つ各所の企望者に向てハ其家に就き自ら巡視して親く該業務を授け到る所好結果を奏し氏の名聲地方に喧傳するに至る明治十年に至り其練習を乞ふもの頗る增加し一人の力能く周到敎導の及ぶべからざるを以て同盟者を集めて一團体を組織し之れを競進組と名け其事務所を自宅ゑ置き氏之れが組長となり已に熟練せるものと擧げて補助となし組員各家に就て其養法を

教示せしむ仝年七月私費を投じ競進組第一回品評會を開き組員の成繭を蒐集し優劣を審査し優等者に賞を行ひ以て該業の奬勵をなす氏は數年前より頗る意匠を凝らし剉桑を給するに斑掛なきを要する爲め桑篩を製出し試用數十種仝十一年に至り初めて意に投ずるの製作を出せり氏又常に本邦蠶種の極めて雜駁なるを憂へ良種の撰定に汲々たり仝十三年に至り上州前橋の豪商勝山宗三郎氏を訪ひ自ら懷抱の意見を吐露し同氏に就て一種類を得之れと自家に試育し其撰繭擇種に注意し愈良種と認むるものを得白玉新撰と命名し專ら此種と飼育す仝年埼玉縣農區委員となり仝十四年第二回内國勸業博覽會に出品せる繭絲共に褒狀を得仝年十月神奈川縣主催聯合共進會繭絲審査係を命ぜられ仝會出品繭三等賞を得仝十五年群馬縣主催聯合共進會出品繭二等賞を得たり仝年仝會と機とし仝縣桐生町に蠶業集談會を發企開設せり明治十年以還當年に至る迄蠶業奬勵の爲め私費を擲ち各所に品評會を開設すること五回に及べり仝十六年縣廳の勸誘よ依り競進組第一回共進會を兒玉郡東兒玉村大字沼上に開設し知事の臨場を乞ひ賞與金を献納して褒賞授與式を擧げたり仝年九月北埼玉郡衙の請需よより仝管内成田町に養蠶集談會を開設し自ら望んで地方れ改良を鼓舞誘導せり兩三年前以來組員益々增加し明治十七年に至り組織を革め現摸を宏大にし競進社となし其本社を自宅の邸内に置き社員全体の堆撰に依り社長となる仝年兒玉町に其事務所及養蠶傳習所と設け又各地よ支部を置き各支部亦傳習支所を置くこと四ヶ所に及び以て專ら生徒を養成し熟練のものは擧て教授員となし各地に派遣して改良普及と計る仝十八年四月東京上野繭絲織物陶漆器共進會出品繭三等賞を得たり仝年六月仝會に於て時の農商務卿より功勞賞金三拾圓を拜受す其功勞證文よ曰く養蠶れ改良を謀らんが爲め夙に組合を設け年々品評會を開き其得失を講究し又養法の傳習を乞ふものあれば組中の熟練家と派遣して叮嚀に之れを導き其鴻益隣縣に及べり今や同盟殆んど八百名の多きよ至る而して尚小成よ安んせず更よ該業傳習所を建築して益々改良の遠圖をなす其功勞大なりとす依て之れを賞す云々仝廿年十月神奈川縣主催一府九縣聯合共進會審査係を命ぜらる仝會出品

繭二等賞を得全廿一年競進社第三回繭共進會を兒玉町に開設し農商務省より技手れ派遣を乞ひ縣知事の臨場ありて褒賞授與式を擧げたり氏ハ全會事務長とし會場全体の統理をなせり全廿二年三月氏農商務省の命を奉じて歐州へ渡航廣く伊佛れ蠶絲業を視察探檢し全十月歸朝復命を了せり全十二月大日本農會農藝委員の委囑を受く全廿三年三月第三回内國勸業博覽會審査官を命せらる全會に於て格別勉勵の賞として銀牌及金若干の下賜と受く全會自己出品の白玉繭種共ゟ有効一等賞を得競進社より出品繭種共に進歩一等賞を得たり全年氏は多年の經驗と考案とと合せ社員の摸範となるべき一大養蠶室と自邸に建築す氏夙に本邦蠶業れ日進月歩し頗る隆盛に赴くれ觀ありと雖ども掃立蠶種に對する成繭の尤も僅少なるを憂ひ深く其源因を探るゟ全く蠶種の不良と其貯藏法の不完全ゟ因る事多きを覺り焦心苦慮して措かず茲ゟ伊佛の蠶況を視且つ伊國に於てパドリ養蠶講習所博士ベルソン氏に就て探究する所に依るも尚其貯藏法の最も必要なるを感じ全廿四年廣く有志を結合して兒玉郡本庄町ゟ一大蠶種貯藏庫を設立し

之れに附屬する第一期及第三期の取扱室を併置し以て公衆蠶種の委托を受け完全に保護して益々本業の改良を謀る全年大日本蠶絲會技藝委員の依囑を受く全廿五年該貯藏庫ハ農商務省の特許を得たり全廿六年十月栃木縣主催一府六縣聯合共進會審査員を命せらる全廿七年一月氏は　勅定の綠綬褒賞を拜受せり該褒章の記に曰く夙に志を農桑に勵まし力を養蠶に竭くし刻苦多年遂に一派の温暖育を案出し催青器及桑篩を新造し桑苗を擇栽して同業者に頒與し良繭を簡選して蠶種を精製し名聲籍甚遠近來て敎を乞ふもの多し是ゟ於て競進社と創立し推されて社長となり廣く生徒に傳習し屢々繭品評會と開て私費を投じ優等者を賞し其後海外ゟ渡航して蠶業を視察し歸朝の後蠶種貯藏庫を設立し以て其得る所を實施し孜々として改良を企圖する等洵に實業ゟ精勵し衆庶の摸範とす仍て明治十四年十二月七日　勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す云々氏が競進社を創始して以來其養法と贊稱し加盟合同するもの頗る其多きを加へ當時に至りて其社員の區域二府三十九縣ゟ跨り社員の總數方に九千名ゟ垂んとし自家及各

傳習所より於て養成せる生徒の數五百七十餘名に及び部下擧用の教授員二百六十餘名より出て年々各地に派遣し其養法の普及と謀る今尚同盟日に加はり益々其擴張隆盛より趨くるを見る

明治廿七年八月

筆記者誌

木村九藏氏養蠶傳習場

春蠶飼育日表

目次

講話筆記

前編

第一　桑芽開葉の摸樣……一頁
第二　養蠶準備……三
第三　養蠶器具……五
第四　養蠶室……八
第五　炭火利用法……一二
第六　蠶種保護法……一五
第七　蠶種催青法……一七
第八　飼育法順序……二〇
第九　上簇法……五一

第十　繭蛹燥殺器及殺蛹法……五六

後編　實蹟筆記

第十一　飼育受持主任及生徒姓名……六一
第十二　催青期……六七
第十三　育養期……七五
第十四　上簇期……九九

目次畢

木村九藏氏養蠶傳習場

春蠶飼育日表

講話筆記

前編

第一　桑芽開綻ゝ摸樣

諺に去年ゝ似たる今年なしと實に天候ゝ年々歳々變動ありて一定せるものゝあらず故ゝ桑芽ゝ開綻蠶兒の發生等又決して毎年同期日のものゝあらざれは養蠶を營むものゝ宜しく年々桑芽開綻の摸樣を調査し且つ陽氣ゝ遲速と計り蠶種の催青に掛酌を加へされゝ蠶兒の發生成育と桑葉の開綻伸長と相伴ゝさるに至るとありて飼育上大に困難を生するもゝなれば其摸樣を檢するは最も必用なる事なりとす之れ啻に桑樹のみゝ就き其摸樣と檢するのみゝ止まらず庭園ゝ於ける梅櫻等開花の摸樣を記憶し之を見て年々の標準となし催青期日に掛酌を加ふるも又可なりとす茲に本年當地方桑芽開綻の摸樣を擧くれは早生多胡桑にありてゝ三月廿七日頃に於て最早桑園中或枝條に於ける桑芽にゝ點々青色（葉片にあらず）を現ゝすものゝあるを認め「青い芽か見へ出した」と人々の口頭ゝ上ると聞くに至れり仝月三十日ゝ至り調査するに仝園中青色の部を顯

せる桑芽を有する枝條其多きを加へたるを見る四月に入るや降雨すること二日間而して三日四日の兩日も頗る快晴にして外温八十度以上に達するに至る爲めに桑芽の膨脹急進せるを認めたり仝五日に至り巡視するに桑芽中最も早きものハ稀に幾分の葉片と現せるものあるを認む本日全園の摸様を平均し之れを昨年仝月九日に調査せるものと比較するに尚本年に於けるもの其芽の肥大なると見る又當月九日に於て調査し之れを昨年十六日に調査したるものに比較するに其成長稍相類似せるを見る爾後日を追て桑芽も次第に成育して仝十四日に至り之れを調査するに桑芽ハ概ね俗に燕口と稱して葉片を現はすを見る就中最も速なるものハ稀に葉形一錢銅貨位の大さに至るものあるを見其平均宛も前年仝月廿日に於て調査せるものと稍相均きを見る依て之れを前年に對照比較して其標準を求むるに結局掃立當時に至らハ五六日間の進速を見るへく即ち前年は五月一二兩日の掃立にて適當なりしを以て本年ハ四月廿七八日に於て掃立なば桑葉に不足なく且つ又時期を後るゝの患なかるへし即ち其目的を以て四月十五日蠶種を貯藏庫より取出し催青室に移す事となす

第二　養蠶準備

故人芝溪田友直氏の著せる養蠶須知に五廣を說けり五廣とハ一に人二に桑三に室四に器具五に簇を言ひ廣とハ即手廣況の意にして其不足なきを言ふにあり古老の輩已に養蠶の準備は凡て完全ならざるべからざるを說けり蠶業進歩の今日養蠶家たるもの原より之れ等の注意あるべきは當然たるとなりと雖も而かも尚往々之れか準備の權衡を得ず爲めに大に失敗を招くもれ少なからず痛嘆すべきの極なりとす元來養蠶の業たる良好れ成繭を收め多額の利潤を得るの目的に外ならざれは勉めて經濟を主とし事業を營むべきが故に無用の人夫を使用するが如きハ勿論好む所にあらざれども若其人夫の不足に失する樣の塲合に於ては到底好結果を望むべからず去て其損失たる實に人夫の賃錢に幾百拾倍に及ぶや知るべからず之れ第一に人夫の不足なきを要するを說きたる所以にして桑葉に於けるも亦然りとす桑葉は即ち蠶兒の餌食なれば養蠶上一刻も之れなかるべからず故に豫め飼育に足るべき十分の用意となし其用意に應すべき飼育をなさゞる可からず人夫に不足なしとて多數の蠶兒を掃立て桑葉に不

足あれハ蠶兒を去て飢渇に陷らしむるの不結果を來すとあり之れ第二ハ桑葉の準備と注意せるものにして又桑葉人夫已に十分なりとて蠶兒を飼育すべき蠶室の之れに應すべきものなければ之れが活用をなさゞるものなれば蠶室の準備又其衡を得ざる可らず蠶室不足なるにも不拘人夫桑葉足れりとなし蠶室に不相當なる多量の蠶兒を掃立飼育するに於てハ爲めに蠶兒を損傷し又甚しき不作と見るに至るべきハ其例不尠とよして之れ大ハ戒むべきとなり斯る蠶室不足の場合に於てハ宜しく之れハ應ずるれ蠶兒を飼育し桑葉等の剩餘は之れを他に融通賣與するか或ハ桑葉の使用に足るべき蠶室を增備すべく四に器具五ハ簇之れ又前三者に伴ひ豫め其準備なかる可からす器具不足なれば取扱上大に困難なるのみならす爲めに無益の時間を徒費するとあり又簇は熟蠶上簇に不足なき樣準備せざる可からす滿室到る所之れと蠶兒の飼育ハ供し上簇期に至りて上簇の室ハ差支へ熟蠶をして風濕の侵入寒暑ノ激變甚しき場所等に宿らしめ或ハ製簇不足の爲め一簇中に累々熟蠶を上せ爲めに烏爛蠶死籠若しくハ同功繭汚繭等をして故らに多からしむる等の事をなすものあり如斯ハ永日丹精を凝らして飼育ハ盡力し漸く成功を告ぐるの曉ハ至り空しく其結繭を不具に歸せしむるものにして損耗之れより大なるハなし故に上簇室には十分の餘地を置き製簇ハ宜しく之れを備へ置ゃざるべからず以上五ッのもの其一を欠けハ即ち好結果を望むべからずして五者共に彼に不足あつて是れに餘裕あらざる樣能く其權衡を失せず並び備つて茲ハ始めて完全なる養蠶を行ひ豐美なる成繭を收め多額の利潤あるべきものなれハ養蠶を營むものハ豫め之れが準備をなすと肝要なり

第三　養蠶用器具

一　催青器

催青器ハ氏の新案製出に係るものにして其構造を畧記すれバ長さ一尺三寸六分計其巾九寸四分計（高さ隨意たるべし）にして其周圍ハ紙の一重張にして圍繞し行燈の形をなせり其前面ハ挿蓋を設けこを拔きて蠶種を挿入る此蓋又張紙なり內部ハ上下共に紙際を隔つる一寸の所より平面に竹骨の棚を設け之れに蠶卵紙を挿入す（大概十枚以下を容るゝハ供す）該棚と棚との間隙ハ一寸宛とこ挿蓋にて口を閉す（其使用法ハ催青法の項ハ詳なり）

二　桑篩

競進社用桑篩又氏が多年の考案に依り製出せしもれにして其數十二種あり何れも竹製にして皆六角目を以て成る即掃立より二眠起四回の給桑迄よ使用す其要たる餌桑の斑掛けなきを勉むるよあり特に稚蠶の際よありてい剉桑頗る細小よして之れを指頭にて與へんとするも五指の間より洩れ落つる剉桑斑掛なきを保し難し若し誤て斑掛をなすに於てハ蠶座の乾燥不平均にして爲めに其蠶兒の發育生長に幾分の不同を來すべく然る時ハ眠起も亦不齊にして飼育に困難を覺ゆべし之れに由て給桑を均一平等ならしむるの工風を凝し之れが發明となすよ至る

右十二種ハ順次蠶兒れ發育するに從ひ剉桑の歩合に應ず篩目の廣きに換ゆ其種別左の如し

一	一分五厘（六角目）	二	一分八厘（仝）	三	二分一厘（仝）
四	二分四厘（仝）	五	二分七厘（仝）	六	三分（仝）
七	三分五厘（仝）	八	四分（仝）	九	四分五厘（仝）
十	五分（仝）	十一	五分五厘（仝）	十二	六分（仝）

三　蠶籠

長さ四尺巾三尺二寸五分よして竹製のものと用ゆ

四　蠶架

蠶籠を挿すべき階段十一あり架柱の丈七尺六寸五分床板より初階に至る五寸初階より第二階に至る六寸以上順次一分宛を增し上階の間隙七寸よ至りて止む

五　蠶莚

經を麻絲一本綟とし藁を織りたる莚なり群馬縣碓氷郡秋間村より多く之を製出す方言之を皆川莚と云ふ

六　羽箒

掃立及裏拔或は蠶座ハ周圍を繕ふよ用ゆ羽ハ長さ一尺内外鷹の羽を以て作る硬に過

ぎず柔のよ失せず掃立よ際し蟻を傷くる等の憂なし

七　貯桑籠

縦四尺横三尺二寸五分深さ四五寸よして竹を以て作りたるものなり摘桑を貯ふるよ用ゆ之れを方言はま籠と云ふ

八　雑具

桑切庖刀　俎　笊　木鉢　籠臺　箕　竹箸　尺度　驗温器

時計　乾濕計　鎌　風見　燭臺　手燭　粟糠篩　籾糠篩　茅網

其他普通養蠶家に用ゆるものに異ならず

第四　養蠶室

凡そ蠶室ハ蠶兒の飼育よ備ふるもれなれば其構造の如何よりてハ養蠶の豊凶に大なる關係あるハ言を俟たざるとにして只其要ハ蠶兒の健康よ適する樣構造するよ外ならず即ち其構造たる風雨霜露ハ勿論冷濕暑熱等を巧みよ避け加之空氣の流通を適好ならしめ適當の温度を室内に整ふるが爲め火力を利用するとあるも炭酸瓦斯或ハ

蒸熱鬱閉の患ひなく即ち其外氣に對する用意と内部に要する働と終始相俟て完全に室内氣候ノ作爲をなし得らるゝを要す是の故に其位置及構造よ就て主とする所は氣候の關係よ應ずべき備となし變動と來すの外氣ハ豫め避け得べく且空氣の側壓或ハ上散自在よして其新陳代謝宜しく蠶兒の衛生に適する樣構造するよ他ならず今玆に示す所の蠶室構造及其取扱法を畧記すれば間口九間奥行三間六分六厘高さ一丈五尺四寸の平屋造瓦葺よして三室連接す飼育場ハ（東西北の廊下ハ各三尺宛南方ハ四尺と除き）即ち之れを三室に區劃し一室間口二間六分六厘奥行二間半東西ハ兩外面ハ土壁にして南北ハ廊下外に戸障子を箝む其障子上は戸袋上を除くれ外は悉く欄間を設く（各戸袋内部ハ悉く壁地となす）床下二尺又土壁にして各室二條（南北四條宛）れ氣管（經四寸）を通し快晴の日は開放して以て床下空氣の交代及其乾燥を計る南北廊下の左右よハ東西對面よ開き戸四個を設け其開き戸より間隙三尺を置きて内よ障子を引くこと四ヶ所共よ全し此障子ハ常に開き置くと雖ども開き戸と明け室内に空氣を入るゝよ當て此障子れ開閉を加減し外氣の過剰或は急劇よ侵入せざる樣斟酌を加へ以て室内暑熱を防ぐに用ゆ東西の兩室は板壁を

以て東西の廊下と界し各室東西對面ゟ四尺の蠶籠を配置す蠶籠の兩側又巾四尺の板壁を以て室と廊下との境と限る該板壁の下部ゟ四寸の腰欄間を置く板壁と板壁との中間八尺の個所ハ南北共障子を引く之を半壁半口と云ふ其南北板壁及障子鴨居の上にも欄間と設け各室ハ共に障子を以て界と分つ又各室其中央に三尺四面の空所と設け蓋をなし以て床下に火鉢と入るゝの便となす此火鉢を利用して床下を乾燥ならしむ其兩側五寸を隔てゝ巾仝しく三尺長さ四尺五寸の火炉を設け各火炉共其中央ゟ近き三尺四面を埋火の個所とし餘の一尺五寸を空所となし其空所ゟ灰の陷らざる樣小高き境をなす其三尺四面の個所ハ上に厚板の蓋をなし爾餘一尺五寸の空所上ハ格子と箝め以て其間隙より火氣ハ上散するに供す而して其床板より天井ゟ至るの高さハ八尺三寸五分にして各障子板壁の丈ハ總て五尺八寸なりとす天井ハ巾二寸板の貫子にて二寸透しに張りたるものゟして之れを小間返しと云ふ此上にハ常に莚一重を布き置ク寒冷なる日に當ては重ねて二枚となし温暖の時に向てハ又一重となし或は扱場中央幾分を剝き去る等其重剝に注意して氣候作爲をなし三眠後は蠶棚の上を除くの外ハ室内温度の維持し得らるゝ限りハ之れを剝き置くと多し而して各室屋上ゟ高窓各一個を設て以て排氣に備ふ高窓東西の兩面ハ土壁を以て塗り間口四尺奥行三尺（但し内法）として南北開閉戸を設く開閉戸ハ唇板にて之れに細繩を附し曳きて室内に垂る之を張弛して開閉自在なり其丈け一尺三寸五分開閉戸の下に又蹴込み板を設く其丈け八寸之れ又開閉自由なり是等と開閉して又室内氣候の作爲ゟ供し主として腐陳の氣を排出せしむ小間返し天井より桁上に至る迄の高さは五尺〇五分ゟして其桁下一室毎に南北中央ゟ丈け一尺巾四尺の欄間各二個を備へて暑熱の際は取外づし以て清涼を求むるゟ備ふ而して其雨戸高窓氣管及二重障子等の取扱如何と云ふゟ南北の雨戸は朝ゟ開き夕に閉づるを例とすると雖ども快晴なる日は早く冷濕なる日ハ遲く開き又風雨の烈しき時ハ之を閉ぢ夕陽の射照する時も亦之を閉て遮斷す然れども此の如き場合に於ては南北共ゟ全閉すること稀なりとす即ち風雨南方ゟ起れば南方を閉ぢ北方ハ開き置き之れに反ずる時は南方を開く（南北何れを閉するとするも一尺置或は二尺置の細目に閉すること場合に依り斟酌あり）高窓は快晴無風ハ日室内温度の維持し得らるゝ限りハ大概之を半開或は全開に

す然れども夜中ハ之れを半開の儘置くか或ハ全く閉することあり三眠後ハ概して之れを全閉することなし（但し風雨烈しき時ハ例外とす）（又室内炎熱の時ハ高窓の蹴込みをも開放す床下氣管ハ室内温度上昇に際し快晴無風の日ハ其蓋を開て外氣を床下より室内ヨ浸入せしめ以て清涼を求め濕潤或ハ雨天の日ハ之を開くとなし南北廊下内外二重障子の取扱は又室内温度の維持し得らるゝ限りハ稚蠶飼育中と雖ども内障子ハ常に開放し置き外障子のみにて飼育するを良しとす尤も室内温度下降するヨ當てハ内障子とも閉づるを要す然れども三眠後ハ無論内障子ハ取外づし外障子のみにて飼育すべし之れ等の取扱ハ炭火利用と相俟ちて室内氣候作爲上須臾も油斷すべからざるの務ヨして外氣の如何に應し臨機の取扱をなすと肝要なりとす

第五　炭火利用法

炭火利用の要ハ第一蠶室内空氣の流通と宜ゑからしめ第二室内の濕氣を排除し第三内氣の整温を補給するにあり人或は火力を用ゆるハ單ヨ低温を補ふのみにありと信ゑ其利用法と誤り之れが爲めに往々失敗と招くに至るものあり勿論春蠶飼育にあり

てハ其當初ハ外氣の温度は概ね六十度以下と示すのみならず終齡に至るも尚冷涼ヨ過ぐるの日ありて發育に適せざるの温度に下ることと往々あるものなれば充分火温の補給なかる可からずと雖ども濕氣を排除し空氣の流通を計るに又大に與て力ありとす抑炭火は養蠶上必要欠くべからざるものなりと雖ども其利用を誤れば却て大なる害を釀すもれなり卽ち炭火と利用せば之より發する炭酸瓦斯ハ蠶兒に甚しき有害のものなれば炭火を利用するにハ其障害を避け氣狀汚物ハ室外ヨ排除すべき極めて綿密の注意を要せざる可からず能く之れが利用と誤らざれば蠶座は常に恰好の乾燥を得桑葉及其他より發する濕氣を排出飛散せしめ空氣能く循環し蠶兒の消化機力を助け食慾增進して其生長頗る著し今其用法を左に擧げん

先づ一室ヨ要する木炭の質と量とを定め之を長二寸計ヨ鉄鎚を以て打折し室外ヨ於て之れを煽す其熾り工合の好度を見るにハ火面僅に白灰の掛らんとするを認めば急き火炉に移すべし機早きに過ぐれば炭酸瓦斯過剩の虞あり遲きに失すれば火勢減却の嫌ひなき能ハず宜しく好機を失ハざる樣注意すべし此時室内は熾熱の劇射を避け

んか爲め豫め蠶棚前に白布れ幕と張り或は襖障子等を立て蠶兒よ熱氣の直射を遮斷し之れと仝時よ天井莚高窓を開放し空氣の流通を迅速ならしむべし然らざれハ埋火の手術を盡すの際温度激昇の恐あればなり炉中れ殘火ハ室外にて煽す炭火の稍熾よたりと認めば先つ板片にて其掛灰を剝き落し之れを長さ五尺計の棍棒前端一尺計りに鉄葉を捲きたるものを突き立て殘火を四方へ搔き寄せ少しく中間を凹くならしめ室外なる炭火と持來り之れに移し器具を以て（器具ハ棍棒と異なり其先端を廣くし恰も鋤の如くなし其廣き部分ハ長六七寸巾四寸計厚一寸計其半面より先端に至るに）炭火の周邊と輕く打ち固め間隙なき從ひ次第に薄くし之れに鉄葉を捲纏したるもの）樣火炉の中央に半圓形を作り巾四寸長さ六寸位の板片にて左右より灰を掛け上げて火頭六七寸を現わし軟質の木炭（消し炭と云ふ）を火頭よ加へ其熾るを待ちて又前後より灰を掛け火頭直經五六寸（室内温度に依り廣狹あり）の圓形を存し他は徐々に周圍の根部より灰を掛け上げて其形摺鉢を倒立せしが如くなすべし消炭を火頭よ置く所以は火勢の急劇よ敎逸することなく徐々に間斷なく發温せしむるが爲めなり而して室内温度下降或ハ多濕若しくは空氣鬱滯の時に當て火力を利用せんとするにハ其根部周邊の灰を薄くし

益々下れハ益々薄くするとあるも決して火面を現し裸火となさゞる樣注意すべし此利用法は天井莚欄間高窓等と相俟て斟酌を加へ炭酸瓦斯及蒸熱の籠らざる樣注意すること肝要なり

第六　蠶種保護法

蠶種保護の取扱を分て三期となす即ち親蛾産卵の當時より冬季貯藏入庫までを第一期とし貯藏入庫より其出庫よ至る貯藏中を第二期と云ひ出庫して催青するを第三期と云ふ抑も蠶種の保護たる撰種と相俟て養蠶上最大の要務にして一朝此法を誤らば原種ハ如何に精良なるも飼育は如何よ鄭重なるも好結果得て望むべからざるは明かなるとなり世の人多くハ蠶兒の飼育には日夜間斷なく注意勉强すると雖ども其護種の法に至てハ恬として顧みるとなく甚しきは之れを放任し徒らよ天然の氣候に任せ爲めよ或ハ不時の發生を見者しくは其被害發生の後に現ハるゝ等往々失敗を招くものあり歎すべき事なりとす即護種中にありてハ温度の激變及濕氣の過剩を虞るものよして其護種中第一期第二期定温の標準を擧ぐれば左の如し

第一期

自蓬卵の當時 至八月	七十五度以上 八十度以下	九月	七十度
十月	六十五度	十一月	六十度
十二月	五十五度	一月上旬	五十度

第二期

自一月中旬 至三月中旬	四十度以下 三十六度以上	自三月中旬 至仝下旬	四十五度
自四月一日 至仝十日	五十度	自四月十一日 至仝二十日	五十五度

以上の定温を標準とし温度を作爲するよゝ其第一期中よりして寒冷炎熱及濕潤の防禦よ注意し第二期卽貯藏の取扱をなすに當り從前ゝ十二月二十日冬至の節を以て貯藏の好期と定め蠶種を貯藏函よ收めて之れを寒冷なる土藏に貯藏ゑ置きたれども去る明治廿六年本庄町日本蠶種貯藏會社よ於て第一期取扱室及第二期貯藏庫を設立するや其第一期扱室よ於て完全なる扱をなさしめ一月上旬よ至り第二期卽ち貯藏庫に入庫して又完全に貯藏の取扱をなさしむ該庫ゝ其構造極めて緻密にして外庫と內庫との二重にゑて蠶種ゝ其內庫に收む內庫ゝ多くゝ不導体を以て其周圍を構成し暖氣の感觸を防き且つ庫內にゝ木炭及生石灰を利用して濕氣の防禦よ供し氣管を備へ之れに附屬する扇風器を設けて以て空氣を庫內に送入し排氣管を建てゝ陳氣の排出を主らしめ庫外に氷室を設けて氷塊を貯へ之れに鉄管を通して以て庫內よ導き昇温の虞なからしめ庫內は終始四十度以下三十六度以上の温度に作爲し三月中旬よ至らば內温を漸進せしめ出庫の際に至らば五十五度に至らしむ此貯藏日數は凡そ九十日間を適度とす然れども其年の氣候と桑芽開葉の遲速とに依り出庫に斟酌を加ふるが故に其日數に幾分の長短あるを免れず

第七　蠶種催青法

催青期とは蠶種を貯藏庫より取出し其當日より孵化よ至るの間を稱し該蠶種漸々温度よ感觸し日を重ぬるよ從ひ卵面次第に青色を催すもれなり故に之を催青と云ひ之れが取扱をなすべき室を名げて催青室と云ふ而して蠶種を催青せしむるが爲め貯藏

庫より取出すの期日は其年の氣候と桑芽開葉の摸樣とに依て早晩あり故に年來經驗する所により桑葉の摸樣を鑑識し出庫の當日より十四五日を經て發生し差支へなきを豫定し出庫して催青室に移す其前已に催青室内は之れが準備をなし置く其準備たる蠶種を移さんとする十日計以前に於て煤拂を行ひ天井上及床下等殘る隈なく清潔に洒掃を行ひ且火炉の灰を取出し天日に乾し凝塊なからしめ再び之を收め後三四日間各室火炉及床下火鉢等に十分埋火をなし内外戸障子及高窓等不殘密閉し室内と七八十度以上の高温に至らしめ床下及室内は勿論柱壁等に至る迄毫も濕氣を留めざる樣飽く迄乾燥ならしめ蠶種を移すれ前日に至り日中殘火を取出さ初めて戸障子及高窓等を開放し外氣を通して不淨の氣と散逸せしめ尚火熱の氣なからしめ後室内を適好温度に作爲し蠶種入室の用意をなせるものにして其翌日蠶種を出庫せゞ即ち催青器に收めて以て此室に移し目通り位の所に上げ置き以て催青に着手す當日より三日間は室に火氣と用ひずして定温を保つを得せしめ四日目午後に至り初めて炭火を室内火炉及床下火鉢に分埋して以て保温防濕の用意に備ふべし後催青日を重ねて七日目に至らば催青器底面の紙に一寸置き位に十餘條の切目を附す之れを蛇腹切と稱す全時に全器の側面左右上部には横に丈け一寸計りを截り去つて窓を穿つべし其之れを行ふ所以は最早蠶卵漸く孵化の期に近つきたるが爲めに次第に空氣の感觸滑かなるを欲するが故なり然して催青温度の標準は左に記する如くにして催青中尤も注意すべきの要點は例令は毎日一度宛温度を昇進するものとせば其一旦昇せたる温度よりは再び下降せしめざる樣勉むべきと又濕氣の過剩を恐るゝにあり以上の注意をなすには必ず火力を豫備して氣候を作爲するにあり又催青器は室内の温度に從ひ其位置を上下すべく即ち温高ければ下部に置き温度下らんとするときは之を上位に移すべし又平常定温を保つのときは目通りの所に置くを常とす而して催青器内の蠶種は毎日二回宛上下に挿し替へ其催青及發生に不平均なからしむる樣注意すべし左に催青中豫定の温度を掲ぐ

催青初日	五十五度乃至六十度	二日目	六十一度
三日目	六十二度	四日目	六十三度午後より炭火を用ゆ

五日目　六十四度　六日目　六十五度
七日目　六十六度　八日目　六十七度
九日目　六十八度　十日目　六十九度
十一日目　七十度　十二日目　七十一度
十三日目　七十二度　十四日目　七十三度にて發生を見るの豫定

第八　飼育法順序

第壹齡摘要

一齡とハ蠶兒發生より第一回ハ脫皮と終る迄の間を唱ふるものにして此間に於て取扱上須要の事項を摘擧すれば左の如し

掃立の事

蠶種の催青と終りて孵化の期ハ望み掃立せんとするの當日午前四時ハ至り卵種と紙に包む之れ發蟻をして這ひ散らしめざるが爲めなり其包み方ハ掃立紙を折半し內部ハ卵紙を挾み前後と横の三方ハ四五分の弛みを置きて原紙ハ裏面に折返し卵面を上に向け之れと蠶籠に載せ蠶棚目通位の所に挿し置く此前卵種を秤量して其量を卵紙の裏面に記し置く之れ蟻量を檢ずるハ便なるが爲なり總して蟻蠶の發生ハ概ね午前十一二時に終るものなれば其掃立を期するハ時間ハ先ち凡そ十分計前包紙を開き其儘據へ置く該時間中蟻蠶ハ室內恰好の溫度に直觸し擧動頗る活潑れ觀を呈す即ち掃立ハ着手す其法先づ左右の中指頭ハて卵紙の兩端中央と抑へ靜に包紙の上より持ち上げ更に左右の拇子にて抑へ代へ後左の中指を屈して肇て卵紙の裏面ハ附けある紙綟紐の中ハ挿し入れ仝時に右手を離す該中指ハてハ其紙紐を引きしめつゝ拇指食指小指の三指にて卵紙の裏面と鼎足形に抑へなば卵紙は左手ハ依りて自在ハ取扱得らる可し玆ハ於て先づ用意の粟糠と量を見込み蟻量一匁に付一合七八勺の割合ハ用意す（薄く裝置の掃立紙面に掃籠ハ莚を布き之れに粟糠は能く洗滌し薄蟹色に熬りたるものを發蟻の立紙を敷きたるもの）に平散し後左手の卵紙を其糠上ハ揭げ卵面の稍下部ハ向ひて傾く樣少しく卵紙を斜になし右手に羽箒を取り先づ其卵紙の下部半面を掃き下す之を掃くにハ羽箒の一端（中央ハり先端）と發蟻面ハ當て蟻の摩傷せざる樣言ふべからざる手術を盡し蟻を彈くが如く掃き落す然して一順すれば蟻蠶粟糠面

に散す之れが纏結せざる爲め又薄く粟糠を散布し又一順すれば粟糠之れに從ふ二三順にして其下部半面と掃き終れば更よ左手に依り卵紙を上下に飜へし未だ掃かざる半面を下に向け又前の手術よ依り掃卸す此手順又二三回よして卵紙全面を掃き下し尙其端邊及裏面等よ散在せる蟻蠶とも不殘掃き落す毎一回掃き下し蟻と蟻と纏結せざる樣粟糠と振り掛け又掃きてハ振り掛くると終始皆同し爲めに用意の粟糠ハ毎回掃下しの都度々々振り盡して掃き終ると同時に其剩餘を見す此際一方よ於てハ直に其卵紙を秤り前量より差引水分一割二歩を減じ蟻量と算出し其蟻量一匁を一坪三合七勺五才〔即ち四匁を五坪〕の割合を以て坪數を定め蟻蠶を移して蠶座を作るの用意をなす〔其用意ハ蠶籠に延と布き之れよ籾糠一坪に付五合の割合を以て〕〔平散し凸凹なき樣板片よて抑へ付け之れよ敷紙を据へたるもの〕然して掃立てたる蟻蠶ハ其纏結せざると欲するのみならず粟糠と蟻蠶と平等に混同せしむるが爲め其掃立紙の一隅を指頭に採り微動せしめつゝ擡げて他の一隅よ捲り寄せ更に又他の一隅より捲ると前の如し終れば更よ又他の一隅より順次捲りつゝ蟻と粟糠と能く混和し糠に依て蟻と吐絲を斷ち蟻と蟻との間は粟糠を以て之れを隔て相凝結せざらしむる爲め掃立紙の四隅より交る々々捲りて蟻蠶を損傷せざる樣掃立紙の中央よ捲り寄せ右手よ羽箒を執り蟻と糠と混和せるものゝ幾分を掬ひてハ左手の掌裡に移し再び右手に分ちて蠶座を作るべき用意の敷紙よ振り込みて厚薄なき樣豫定の坪數に擴ぐべし玆に於て蠶座初めて成る

以上ハ其手順の大畧を示せるものよして其詳細れ手術に至りては筆舌の盡す能わざる所にして斯の如く掃立よ緻密の手術を要するものハ他なし蟻蠶の初めて卵殼を出するや例令へ全身よ長毛を生ぜ外物の刺擊を避くるに足るべしと雖ども体内の諸機關及皮膚等は極めて柔弱なるものなれば之れを損傷せしむるとなく且つ正確なる蟻量を撿せざれば增減其他に就き終始不都合なるが故に其調査を精密にし加ふるよ其發生兩三日に至るの蟻蠶を掃立つるにハ前日發生せるものを掃立つるの際翌日發生すべき蠶卵を傷けざる樣注意せざるべからざるを以て別に簡易の掃立法數多あるにも不拘悉く之れを斥けて斯る掃立手術を施す所以なり

居並桑給與並に桑篩使用の事

掃立てたる蠶兒ゝ給すべき桑葉は之れを當日早天撰採して適宜の貯藏とをし置き掃立をなすと仝時に之れを巾五厘長二分程に細剪し蠶座の定まるや直に其一坪に對し二匁六七分乃至三匁（桑葉及温度に依て仝じからず）の割合を以て一分五厘六角目の篩を用ひ斑掛なき樣給與すべし抑も此給桑たる育養れ第一着ゝ居り其與桑の位置ゝ卽ち衆蟻の占むる位置とあり彼れが栖息の定まる所ゝして此際よりして平等配列の習慣を作るゝあれば篩の利用に手術の巧妙を盡し毫も斑掛なき樣蟻上ゝ散落せしむると宛然微雨の春草を潤す如く齊一にして厚薄不同なきと要す故に此給桑を名けて居並桑と稱す

二日目增席の事

當日の剪桑步合ゝ巾六厘長三分五厘位を度とゝ篩ゝ一步八厘目を用ゆるゝ至り仝時に蠶兒も漸々生育するを以て玆に增席の必要起る其法先づ增席すべき蠶座の下に竹箸を挿入し蠶座の幾分を切離して左手に移ゝ竹箸を以て之れを小片に撮み切りて裝置の別籠（別籠の裝置ゝ前日と同じく之れに敷紙を布き增席すべき坪數を豫定して用意し置く）玆に於て其席前日ゝ倍し卽ち掃立の際五坪半のもの（蟻量四匁に就て其坪數を示す以下皆仝じ）擴げて十一坪となる凡て增席を行ふにゝ其手術を施すれ際蠶座乾燥に過ぐるの虞あれば給桑の後四五十分間を經過せば直に着手すべく旦つ增席ゝ可成午前に於て之れを行ひ日中高温の際ゝ之れを行ふことゝ忌む可し

三日目毛振の事

本日午前に至らば蠶兒ゝ益成長發育して其体色稍白色に變ず方言之れを毛振と云ひ往昔當地方にありてゝオシラと云ひしと蓋し蠶体發育の爲め發蟻れ當時認めたる長毛の自然ゝ判明し難きゝ至り宛も其毛を振落したるが如く見ゆるを以て斯くゝ名けたるものなり若し不良なる蠶種或ゝ貯藏催青と誤りたるものより發生したる蠶兒にありてゝ其毛振區々雜駁にして一齋ならず爲めに明ゝ見るべからず故に此毛振の摸樣を鑑み以て結果の豐凶如何を卜するに足るべし

當日も亦增席をなし前日の倍數卽ち二十二坪となす

四日目紙扱れ事

已ゝ毛振れ期を了り蠶体白色に變じ食慾益進み卽ち大食期に入る本日ゝ蠶座を增席

すると仝時に紙拔を行ふ其法先づ增席せんとする二回以前の給桑に際し紙拔用意として糠入を行ふ其法先づ蠶座の一坪に對し粟糠凡そ一合五勺位の割合を以て蠶座上よ平散し蠶兒の体軀は糠の爲めに埋りて其頭部のみ顯れ居る位を好度とし後糠上に給桑をなす（糠上の桑は平常より少しく多量なるを要す）然るときハ蠶兒ハ餌桑を慕ふて糠上に現はれ喰桑よ就く其餌桑の稍若乾きに至りたりと認むるときは重て糠上二回の給桑をなし後四五十分を經て蠶座の端邊より羽箒を以て其糠上の蠶兒を殘桑と共よ叮嚀に捲り寄せ羽箒よ依り左手裡に取り增席すべき用意れ別籠（別籠の裝置ハ蠶籠よ莚を布き之れに籾糠を薄く散布して增席すべき坪數を豫定し用）に移し竹箸を以て點々配置し移し終れば舊籠糠下に殘れる莢沙及數紙を意し置く取去るべし（即ち後齡の中裏拔に當る）故に之れを名けて紙拔と云ふ此際蠶座ハ前日に倍し其坪數四十四坪となる即ち本齡期中ハ此坪數と以て終る

糠入注意の事

糠入ハ裏拔の用意として之れを行ふものよ去て其注意すべきは毎回共に同樣なりと雖ども殊に今回の糠入たる微少なる蠶兒に向て施すものなれば誤て其度を過し或ハ

平均ならずして振糠に厚薄を生ずる樣の事ありてハ蠶兒は爲めに糠下よ蟄伏し匐ひ出づると能はずして不知々々蠶兒を減失に歸せしむるとなきを保せず三齡四齡の蠶兒にありてハ其体軀長大となるを以て假令其度を過り稍厚きよ失するとあるも能く糠上に現ハるゝの勢あるのみならず一目して其所在分明なるが故に減失するの患なきも稚蠶の際ハ兎角目に觸れ難きを以て糠入裏秡の際に於て偶然の中に減失するハ往々免れざれば此糠入にハ特に注意に注意を加ふべきなり斯く注意するも尙其法を過り蠶兒を減失するの患ありと認むる時ハ增席れ際糠入をなさずして只前日取扱ひたる如く竹箸と以て蠶座の儘之れを別籠に分移し增席をなし殘れる紙を秡き去るも强ち不可なかるべし何となれば此際の桑葉ハ細剉せるものなれば蠶坐も速に乾燥するが故に莢桑に蒸熱を釀し或は腐敗する等の患大概之れあるとなし故よ尙蠶蓐の儘增席するも蠶兒を傷ふことなかるべし（尤も霖雨の際或ハ飼育の不當よりして蠶座の堆積せるもの若しくは乾燥惡しき蠶室にありては此法に依るハ宜しからず）故に糠入の方法未だ熟練せざるものハ却て此法を用ひなば蠶兒減少の患を避くるを得べし

眠裏拔糠入の事

紙拔をなし增席を行ひ蠶兒を清潔なる別籠よ移しなば食慾漸進し成長肥大となり五日目午后に至らば蠶体の皮膚上稍光澤を現いさんとし食慾一層盛なり之れ催眠の兆候にして此際の給桑一回は一回より漸々回を重ぬるよ從ひ益々皮膚よ青色の光澤を現す而して後更よ其光澤の變じて淡黃色と顯いさんとするもの點々之れあるを認むへし蠶兒此色を帶れば卽ち就眠切迫したるものにして口より吐絲をなし殘桑に纏着せしめ自已の腹足尾足の爪を之れに掛け脫皮の身搆をなす故よ蠶兒皆一齊に青色れ光澤を現し就中其淡黃色を帶びたるもの一坪に付き一二頭を認めなば之れ卽ち眠裏拔糠入の好時期なれば油斷なく直に糠入を行ふべし諺よも飼育れ秘術い眠起にありと云ふ如く此際の注意又決して忽よす可らざるものよして該糠入の如きも其期早れよ過ぐれば裏拔迄に給桑回數を增加せざる可からず斯くて い蠶糞及稺桑を眠蓐に混ずると多く又遲きに失すれば蠶座い蠶兒の吐絲に纏結せられ又手を下す能いざるよ至り寧ろ裏拔をなさゞるの障害なきに如かざるとあり是故に其良機を外さざる樣糠入を行ふこと肝要なり然れど其蠶兒にして原種れ不良或は護種の不完全なるか若しくは掃立以來れ養法を誤りたるものよして其發育區々に渉りたるものにありてい特有の光澤も一齊ならす爲めに判明せざるものなれば此期よ接し帶色如何を察し好機を得んとするも摸糊雜駁の裏よ跡を失し之れを確認する能いざるよ至るとあり其弊や延ねて結果に及ぼす事又尠少よあらざるは實際上見聞する所よして斯る蠶兒よ向つては又大よ斟酌を加へざる可からず

斯くて糠入の好機を認め卽ち粟糠を用意して眠裏拔糠入をなす糠入れ注意い前項紙拔の際に揭げたる如しと雖ども今回の糠入は一層又注意よ注意と要するものなり若し此振糠厚きに過ぐれば糠下に潛伏して就眠するものなきに非ず又極めて薄きよ失する時い蠶兒糠下の殘桑に纏着して脫皮をなさんとするものありて爲めに裏拔よ因難なるのみならず斯くてい裏拔の際蠶兒を減失するとあれど其振糠い薄く兩三回に振りて厚薄過不及なき樣適度に施すと肝要なりとす

糠上給桑れ事

糠入と終らば即ち直ち糠上第一回の給桑をなす此給桑ハ其量平常より幾分多量ニ給與すべし而して暫時間の後此殘桑稍若乾きなる時次回の給桑をなす此際蠶兒は就眠愈々切迫し食慾大に減退し餌食を求むるもの甚稀なるに至る(此二回の給桑ハ敷桑と稱して裏拔をなしたる後其殘桑ハ即ち蠶兒の眠蓐となるものなり)而して二回目の給桑と終り四五十分を經過せば眠裏拔[ボッチ]擴げに着手す

眠裏拔[ボッチ]擴げの事

[ボッチ]擴げとハ眠裏拔の際之れを行ふものにして其法紙拔の際と同じく羽箒を以て糠面の蠶座を其端邊より捲り寄せ其幾分を左手に取り右手ニ竹箸を用ひて其蠶兒と殘桑と混同せるものを恰好の大さに狹み分ちて別籠莚上に點々配列すると尺方一坪ニ付凡そ百[ボッチ]乃至[ボッチ]ニ對し凡そ十頭を置くれ標準ニ據る其縱横整列の有樣宛然稻田の刈跡を遠く望むが如し此れを行ふニ竹箸を用ゆるは稚蠶の際のみにして三眠期に及へば蠶兒肥大となるを以て指頭に於て之を行ふものとす

[ボッチ]擴げの必要なる事

以上れ如く眠期に際し[ボッチ]擴げを行ふ所以ハ蠶座と分ちて點々[ボッチ]ニ配列すれば催眠蠶兒ハ其[ボッチ]の小高き部分に於て適宜の個所を占めて脫皮の身搆をなすべし然して其[ボッチ]と[ボッチ]との間隙ハ空氣能く流通し其乾き又宜しきものなれば之れが乾燥すると仝時ニ蠶兒も快く一齋に就眠し安全蛻蛻をなし又其脫却せる舊皮も直に乾燥し蠶蓐腐敗等の患なく從て起蠶又强壯健全なるを見るべし此故ニ眠蠶期裏拔の際ハ此[ボッチ]擴げを行ふものなり人或ハ就眠の際其乾燥を虞れ室内に水を撒き或ハ不時の振桑をなして蠶兒に濕氣を與ふるものあれども斯は極めて羸弱なる蠶兒に向て施すものなればいざ知ず苟も健全なる蠶兒ニして眠前已に飽食せしめ絶食期に要する脂肪と水分とを十分体内に貯成せるものに在ては決して其必要なきのみならず徒らニ其蛻蛻をして却て緩漫ならしむるの弊あり永年の實驗上眠中乾燥の爲め毫も蠶兒に被害を認めたるとなければ健全の蠶兒に向ては濕潤の必用なきハ信じて疑ハざる所なり

[ボッチ]上橋架け桑並に止桑の事

「ボッチ」擴げとなしたる後其眠蓐の乾燥い平常給桑の時よりも稍長時間を要するものなれば宜しく其乾燥加減を見計ひ此よ「ボッチ」上第一回の給桑となす其切歩い其丈を稍長く剉みて「ボッチ」の山と山とよ跨る樣給桑すべし之れを名けて「ボッチ」上橋架け桑と云ふ此際蠶兒い既に絶食して喰桑をなすものい全籠中三分の一に不及而して後又時間を移し前回給桑の乾凋加減を見計ひ更よ第二回の給桑をなす此際に至らば蠶兒い大概就眠して食と求むるものあるも一坪に付僅々十二三頭れ上よ出でず即ち之れを本齡の止桑とす

眠中心得の事

蠶兒絶食中は就眠えたりとて氣候の作爲其他の注意に至る迄之れと放任して顧みざるものあり之れ大に過れるものと云ふべし古より蠶兒が竣蛻をなす爲め絶食するの間を眠と稱し來りしより或い此際に於て蠶兒い安眠するものと誤認するものあれども蠶兒の眠と稱するは吾人の睡眠よ於けるが如く快樂のものに非ず彼れが生長肥大するよ從ひ其皮膚の伸張極度に達すれば之れを脱却し更に新皮に依て發育するものにして彼れが脱皮期に接するや脱皮の身搆をなし其絶食中い体内の脂肪よ依り其生活を保ち躰軀を廻轉伸縮して舊皮を脱却するには容易の困難にあらざるを見ると宛も吾人が病痾に罹りし際よ於けると一般なれば其看護に充分手を盡さゞるべからず彼れが眠中に於て最も虞るべきものい温度の激變と冷濕を感受せしむるを以て大なりとす若し眠蠶よ之れを えて感受せしむる時い到底上作い得て望むべからざるものなれば飼育者は宜しく之れを記憶に存ずべきとなり其他寒風の室内よ侵入して蠶身に直觸し又い喧騒なる等共よ嫌忌する所よして特よ晝夜油斷なく之れが保護と怠るべからず

桑葉摘採心得の事

蠶兒は桑葉を變化せしめて生絲とあすべき機關の如きものなれば佳美にして多量の生絲を得んと欲せば宜しく其原料たる桑葉れ良好にして蠶兒の衛生に適せるものを給與せざる可からず之れ桑質の撰擇を要する所以よして彼の伊佛兩國に於てい白桑と稱し桑實白色に熟するものを以て良好となし專ら之れを飼育よ供し他の種類を用

ひず該種を餌桑ゝ供するとき〻蠶座の乾凋最も宜しく蒸熱と釀す等れ患なく飼育容易なりと而して氏が多年經驗して飼養に最適せりと認めたる早生桑にして本邦種にあ〻ては即ち群馬縣産多胡早生にして氏は專ら此種を栽培して飼養に供せり此種亦其桑實白色に熟し所謂白桑なるものにして其良好なる前顯の如く蠶座ゝ熱氣或は腐敗を釀生する等の憂少なきは該種の特性にして他種に多く其比を見さる所なり而して桑葉の摘採方〻稚蠶の際にありては尤も注意せざる可からず例令は掃立當時ゝあり て桑樹の新梢中四五葉を開綻せるものゝとせば其先端即眞芽に近き第一葉〻紫色を帶び第二葉〻黃色にして共に未だ嫩若に過ぎ水分を含有すると多く之れを蠶兒ゝ與ふるときは殘桑黑凋し蠶坐の腐敗極めて速ゝにして黴菌を生じ易く爲めに蠶兒を損傷し豐美れ成繭を收むる能〻ざるべし故に之れ等を摘採するとなく第三葉第四葉〻俗に葉に實入りたりと云ふ如く已ゝ青色を帶び光澤あるもれなり即ち之れを摘採して餌桑に充つへし然れども葉質硬厚に失するもの又宜しからざれば掛酌を加へて適當のものを撰採すると肝要なり

增席心得の事

本齡期にありて增席の手段を行ふ〻掃立翌日より四日目に至るの間毎日一回宛之れを施すものゝとし第二日は十一坪翌日〻二十二坪第四日目に至り更ゝ倍して四十四坪となるものとし第四日目に至り更ゝ倍して四十四坪とす之れ其取扱甚繁雜なるが如しと雖ども蠶兒の生長割合〻此齡期を以て最も盛なりとす即ち每齡生長の極度概ね前齡の休量に比し五倍乃至六倍の生長なるも獨り此齡期にありて〻掃立より初眠に至るまでに殆んと十四五倍の成長に至るを見る斯く此際ゝありて〻著しく成長するものなるにも拘らず徒らゝ其勞を厭ひ之れを等閑に附し增席を怠るゝ於ては宛も農作物を密植すれゞ其生長十分あらざると一般蠶兒ゝあり ても又發育完全ならざるのみならず殘桑堆積し互ゝ纏綴して蠶座ゝ空氣の侵入を妨げ爲めに濕潤或は蒸熱を釀し甚しきに至て〻黴菌を生ずるゝ至り大ゝ蠶兒を傷ふことあり又日々增席の手數と省く爲め掃立當時より之れを極めて薄く疎らゝ配置する時〻給桑の量に顧る掛酌を加へざるべからず薄飼の蠶兒に〻其掛酌と過り易くして

前者に讓らざるの損傷を招く事あり此の故に假令其取扱は如何に繁雜なるも日々蠶兒の生育に從ひ之れに應じて居並びの疎密を失せざる樣增席の勞を執ると肝要なる所以にして之れ啻に蠶兒の成育容積に如何に關係あるのみならず增席の都度々々蠶座を點々分離し糞沙を除去して別籠に移すが故に蠶兒の位置も從て轉じ發育不齊の患なく蠶籠中蠶座の間隙に至るまで空氣能く流通し(方言之れを蠶に風入と云ふ)乾燥最宜しく且つ清潔なるを以て毫も蒸熱或ハ腐敗の氣を釀す等の患ひなく蠶兒の衞生上又尠からざる効驗あるものにして增席の事たる決して忽がせにすべからざるなり

四齡前絲網の使用を廢したる事

蕻沙を去り或ハ就眠の際遲れ蠶を釣り去る爲め從前ハ絹綿麻絲等を以て作りたる蠶網と用ひしものなるが近時ハ至り悉く之れが使用を廢したり卽ち該絲網を用ひて裏拔を行ふハ稍輕便ハして迅速なるが如しと雖ども之れを用ゐるときハ蠶兒の不齊を來すと大なるを見る假令ば稚蠶の際にありて裏拔を行ハんとせん歟先づ蠶座上ハ蠶網と布き網上に二三回の給桑を行ひ後網を取りて別籠に移すものなるが其蠶網を蠶

座ハ掛くるハ當てや如何に注意すると雖ども蠶座ハ出沒あり又蠶網に凸凹の弊ありて平等ハ蠶座と蠶網と密接する能ハずして即ち蠶座の高き個所ハ能く蠶網ハ接し蠶兒も直に網上ハ出づると雖ども其凹所にありてハ蠶網を高所に支へられ爲めに自然蠶網と蠶座との間に隙を生じ網上に給桑するも蠶兒未だ幼少なるが故ハ凹所に在るものハ爲めに網上ハ出でゝ餌桑を求むると能ハず竟にハ一回或ハ兩三回の食ひ後れをなし其結果即ち不齊の原因となるべし又裏拔を行ひて網下に殘れる蠶兒を不知々々廢失ハ歸せしむる等の弊あるのみならず特に眠前裏拔の際にありて蠶兒既に就眠の用意をなして蠶網に結着せるものを彈き落す等の事あるときハ蠶兒を損傷すると亦甚しきなり之れハ反して裏拔ハ當り粟糠或は籾糠を用ひ之れに給桑するときハ蠶兒一齊に糠上に出で仝時に餌桑に取り附くが故に發育ハ不同を來す等の患なく且分箔增席等極めて自在にして其都度蠶兒の位置を轉じ且つ糠を依て濕潤を避くるの功あり故に近時ハ四齡前裏拔ハ當てハ蠶網を廢し專ら粟糠或ハ籾糠を使用するに至れり又就眠期に當り止桑をなしたる後遲れ蠶を釣り上ぐる爲め絲網を用ひ來りしが明治

廿三四年の頃より蠶種の精撰に一層の注意を加へ其貯藏催青の法を完全ならしめたるより蠶兒の就眠頗る能く一齊し當時よ至りては遲れ蠶を釣り上ぐるの要なく之れに用する絲綱をも廢するに至りたり

第二齡摘要

初眠起中桑を與へてより第二回の竣蛻迄と稱して二齡と云ふ本齡ハ各齡期中尤も短日にして終るものなれバ給桑其他勉めて油斷す可からざるを要す

中桑及桑附れ事

蠶兒脫皮をなす爲め絕食をるを眠と云ひ脫皮を竣りたるものを起と云ふ眠蠶概ね起揃ひ初めて給桑するを中桑と稱し第二回よ給するを桑附と稱す卽ち初眠止桑をなしてより後は氣候溫度により其時間に長短ありと雖ども凡そ三十五六時間を經過すれバ蠶兒ハ大概起揃ふものなり起揃ひたる蠶兒は室內の氣候に浴し其体軀を乾かし暫時の後食を求めんとして匍匐するに至るべし之れ食慾萌發の兆なれば玆に初めて給桑を行ふべし然れども此際未だ竣蛻せざるもの尺方一坪中二三頭あるを免れず故よ之れを中桑と云ふ中桑給與れ後凡そ八時間を經なば最早蠶籠全面齊しく竣蛻をなし眠蠶を留めず且つ曩に給與したる殘桑も十分乾凋して蠶兒ハ悉く食慾進與し餌桑を求むると切なるを認むべし玆に於て第二回の給桑を行ふ之れ卽ち桑附なり而して該中桑を與ふるや其時機早晩に失せざる樣適度を認むると最必要にをて其機早きに過ぐるときは起蠶の脫却せる舊皮及糞沙に含める濕潤と臭氣とハ未だ乾燥發散するに至らず加ふるよ其給與せる殘桑とよ依り蠶座に腐敗を來さんとし之れが爲め眠蠶よ障害を與ふるものなる歟起き遲れたる眠蠶愈其竣蛻の遲延するを見るべし又假令竣蛻をなしたる者と雖ども脫皮の當時は孵化の時と同じく諸機關軟弱よして敢て食を貪らざるものなれば其早きよ失するを好まず又之よ反し遲きに過ぐるときハ早起のもの飢餓に至るの恐れなき能ハざれば中桑の給與は宜しく其適度を認め遲速なきを要するもれなり

中桑後四五回の給桑心得れ事

中桑後四五回の給桑ハ極めて其量に注意し過不足なき樣給與せざる可からず總じて

蠶兒の發育は各齡中何れの時に於て最も盛んなるかと云ふよ初齡よりては掃立の當時其成長最も著しく以後各齡期よりては起蠶中桑より四五回給桑の際を以て最も盛んなりとす故に中桑後四五回の給桑は勉めて彼れが飽食よ足るべき樣給桑せざるべからず然れども茲よ最も恐るべきい只彼れが飽食よ適する樣給與すべしとて其量多きに失し或は前回の殘桑乾凋如何をも顧みず徒に給桑よ給桑と重ぬる樣の場合よ於てい即ち殘桑堆積し加ふるに蠶兒が脫却せる舊皮及眠期に排泄せし蠶糞とに含める濕潤と惡臭とにより忽ち蠶座に腐敗を生し易く斯くてい大に蠶兒れ衛生を害ひ彼をして不測の疾病よ陷らしむるとあり實に此際給桑の適否い養蠶の豐凶に大なる影響を及すものなれば其量不足なき樣給すべきは勿論なれども又決して多量に失せざる樣注意し且つ前回の殘桑及脫却の舊皮等其乾燥加減を見計ひ次回の給桑よ斟酌を加へ殘桑をして堆積せしめず蠶座に濕潤或い腐敗の氣を釀さしめざる樣勉むると尤肝要なりとす

二日目起裏拔の事

中桑後四回の給桑と終り第五回の給桑に着手せんとする以前起裏拔用意として糠入をなす（糠入とは蠶座上に糠を平散し之れよ給桑する）を云ふ總て裏拔の際に之れを行ふものなり（糠上二回の給桑を終り糠上蠶座を捲りて別籠よ移し增席す其坪數前齡れ五歩出しとし四十四坪なるものを擴げて六十六坪となす

三日目中裏拔の事

起裏拔をなし後又四回の給桑を終らば中裏拔用意として糠入をなす（前回迄の糠入よい粃糠を用ひ來りしが今回より以後毎齡とも粃糠を用ふ但粃糠は粳糠に限る）糠上二回れ給桑を終らば裏拔を行ひ別籠に增席す其坪數前齡よ倍し八十八坪となる此際に至らば蠶兒い食慾增進して發育殊よ著し給桑に油斷なく飽食せしむべし

四日目眠裏拔糠入より止桑迄の事

中裏拔をなし蠶座よ清潔を與ふるや蠶兒ハ眠前大食期に入り食桑一層盛なるを以て勉めて給桑に注意すべし而して漸々催眠の兆を現ハすを見るよ至らば茲に好度を認め眠裏拔用意として糠入を行ひ給桑をなす該糠上の給桑い蠶座清潔なるが故よ食込

最宜しく俗に眠前オコ摘へと稱して食ひ後れたる蠶兒も此際に於て十分食桑して急進せしむる樣特ょ良桑を撰んで摘採し剉方を適度にし第一回は稍其量を增して給與すべし而して裏拔れ手術を盡すの間蠶座乾燥ょ過ぐるの虞あるを以て第一回の給桑未だ十分乾凋せざるに先ち(六歩乾き)次回れ給桑をなすべし次回の給桑ハ其量を前回に比し稍減するものとす(此糠上の給桑ハ今回のみよあらず各齡共必ず其斟酌あるべし)以上二回の給桑を終らば四五十分を經て眠裏拔(ボッチ)擴げを行ふべし其法前齡の眠期に於けるに異ならず只其(ボッチ)の數一坪に付五十(ボッチ)二(ボッチ)ょ付凡十頭を置くの標準に據るのみ而して(ボッチ)の乾桑工合と見計ひ(ボッチ)上に二回の給桑と了らば之れを止桑となすと亦前例ょ仝じ

第三齡摘要

二眠起中桑より第三回竣蛻までを三齡と云ふ本齡期中に於て注意すべきの要點ハ初齡二齡の頃にありてハ天候稍寒冷なるも外氣能く乾燥し室内に於ける蠶兒も未だ幼稚なるが故に其育場の如きも狹隘にして足り新鮮の空氣欠乏を生ずの恐れなく又剉桑も短冊切ょして其量も鮮少なれば從て殘桑も能く乾燥し爲めょ蠶坐に冷濕或ハ蒸熱を生じ腐敗を釀す等の患少く室内氣候作爲も自然容易なりと雖ども本齡期に入るに至らば最早天候も追々冷涼を去りて暖暑に向ひ雨候の節ょ近き從て外氣ハ濕潤を增嵩し然して室内に於てハ蠶兒も次第に成長肥大となり給桑も多量となるのみならず桑葉も漸々硬厚に傾き其切歩も三角切と稱して鱗形に剉むょ至り且つ俗に舟の長喰ひと唱ふる如く此齡期中ハ其餐桑日數長きものなれど勢ひ蠶座ハ乾燥緩漫に至るを免れず室内ハ兎角鬱塞し易く空氣の交替宜しからざるに至るものにして蠶兒を傷ふは多くハ本齡期中より以後に於けるものなばれ勉めて室内空氣の新陳代謝を計り且つ乾燥を求め蠶座の清潔を主とし蠶兒の衛生を害ふとなく發育迅速ょして肥大ならしむる樣注意を竭すべし

裏稜增席の事

起裏及中裏稜ハ前齡に倣ひて之れを行ひ只其坪數起裏ょありてハ前齡の五歩出し即ち八十八坪のものを百三十二坪となし中裏ょあるてハ前齡の倍數即ち百七十六坪ょ

擴ぐるのみ眠裏稜「ボッチ」擴の手順又前齢に異ならず其「ボッチ」の數一坪二十五「ボッチ」一ボッチに凡そ十頭を置くの標準に據る

剉桑法を改め桑篩を廢する事

本齢起裏の際までは剉桑は短冊切と稱し長方形に剉み篩を用ひて之れを給與せしが起裏糠上の給桑より其切歩を三角切と稱ゑ鱗形に改め篩を廢止し手にて之れを給與す之れ蠶兒も漸々生長し剉桑又之れに伴はざるべからざるを以て斯く其切歩を改むるものなり若ゑ又此際の用桑新梢の儘掻ぎ取りたるものなれば剉桑の後箕を用ひ簸きて其小梢を去り然る後給與すべし尚ほ就眠の際「ボッチ」上れ給桑は從前に倣ひ再び短冊切となし給與すべし

第四齢摘要

三眠起中桑より第四回の竣蛻迄を稱して四齢と云ふ此期に至らば天候も一層暖氣に向ひ外氣には濕潤益加はり室内は蠶籠充滿して殆んど餘地なきに至り飼桑の給與其多きを加へ取扱人夫も亦增加するゑ至る故に特ゑ室内空氣の腐敗鬱滯せざる樣新陳代謝を計り尚ほ防濕の注意等怠るべからず

起裏稜增席の事

起裏稜增席坪數は又前齢の五歩出しにして之れを二百六十四坪ゑ擴ぐ

中裏稜注意の事

蠶座の增席は今回と以て終り爾後は上簇期ゑ至る迄之れを行ふとなし故に今回の增席は其注意を要する所以にして全体今回までの裏稜增席には只單ゑ肉眼の鑑定する所に依り分席したるものにして幾分其頭數の多寡に差違なきを保せず各籠頭數の差僅少なるゑ於ては差支へなしと雖ども若し其多寡に著し如差違ありとせば其取扱上大に困難なるものなり何となれば給桑の際に於ても各籠其頭數に從ひ其量に斟酌を加へて給桑せざるべからず各籠全量の給桑を行へば卽ち餌桑の乾凋不平均にして從て蠶兒の發育又不同を生ぜ其不同は延びて眠起の不同ゑ及ぼし其結果や又成繭の不齊を來すと明かなるとなれば之れを各籠平均に配置せざる可からず然れども稚蠶の際は之れを計算ゑ平均に分席する等到底行ふ可からざる者なれば宜しく肉眼の鑑定

よより等分に分席する樣注意するの外なしと雖ども今や蠶兒も生長肥大となり其取扱稍粗畧に出ずるも蠶兒を損傷する等の憂なければ此際に於て其頭數を計算し各籠均一に配置するを宜しとす即其配置の頭數一坪に對し壹百頭の割合を適度となす(尤も蠶兒れ種類に依り增減あり)一坪一百頭の蠶兒ハ其當時ハ稍疎薄に過ぐるの觀ありと雖ども今回限り增席せざるものなるが故に只幾分給桑の點よ斟酌を加へ多量に失せざる樣注意に油斷なげれば其生長肥滿すると特に著しきを見るべし若し極めて多數の蠶兒を飼育するものにして人夫に限りあり悉く頭數調査の暇なく止むを得ざる場合よ於てハ僅に二三枚の頭數を計算して豫定の頭數を置き之れを標準と去て比較しつゝ各籠に增席し可成其頭數平均なる樣注意するこそ齋一なる良繭と收むるの要務なり

四眠期注意の事

本齡の就眠を大眠と稱し各眠期中よ於て尤も長時間よ渉るものにして從て之れよ應ずる注意なかるべからず今其要を擧ぐれば彼れが皮膚上に充分眠色を現ハし糠入の期已に熟し卽ち之を行ひ糠上第一回の給桑をとそに當りてや其給桑を誤る時は卽ち齊一の眠起を見ると難きものなれば其給桑よハ特よ陽地れ良桑を撰採し不足なき樣給與すべし之れに反して其際日蔭樹蔭或ハ濕地等の桑葉を與ふるときハ就眠不齊を來し起蠶に傷害を生ずるとあれば其撰桑及剉桑等を誤らざる樣注意すべし斯く清潔なる糠上に新鮮なる良桑を與へなば前に述べたる如くオコ揃へと云ひ蠶兒ハ此期に於て十分飽食し食ひ遲れたるものも大よ其成育と進め就眠も一齊なるに至るべし而して第二回の給桑ハ已に蠶兒の食慾大よ減退するものなれば別に撰桑を要せず此給桑を終りたる後暫くして眠裏拔(ボッキ)擴げを行ひ(ボッキ)れ乾燥適度に至ると認めば茲に(ボッチ)上第一回の給桑をなすべし其量又少きに失す可からず而して(ボッチ)上第二回れ給桑を行ふハ宜しく眠蠶の摸樣と晴雨乾濕の如何を鑑み若し其際降雨にして冷濕なる時ハ前回の給桑稍乾枯するを待ち然る後之を行ふべく之れに反して天氣快晴氣候適順にして乾燥十分なりと認むる時は假令ひ眠蠶は未だ七八歩のみよ過ぎざるも前回の殘桑若乾なるに當て其給桑を行ふべし此給桑たる啻よ未眠蠶よ給與するの

目的なるよ非ず眠蓐をして急劇に乾枯ならしめず時を移すよ伴ひ漸々乾燥に至らしむるの注意に外ならず若し又此際氣候不順よして「ボッチ」上第二回の給桑と行ふも尚悉く就眠に至らず餌桑を求めて「ボッチ」を離れ籠中を彷徨するものある樣の場合よ於ては「ボッチ」を取直しをなすに如かず然る時は其就眠甚速なるものなり甚「ボッチ」取直しの方法は別籠に乾きたる蠶莚を裝置し籾糠を散布して「ボッチ」を其儘取り去りて之れよ移し置き換ゆるなり斯くの如くすれば自然眠蓐に混せる蠶糞を去り眠蓐清潔となり且つ乾燥するが故よ直に就眠よ至るべし茲に於て又其眠蓐の乾燥工合を見計ひ第三回の給桑をなし之れを止桑となすべし然るときは初めて安全に脫皮を竣り起蠶亦一齊なるを見る若し斯る場合に望んで此方法を行はず其儘給桑を重ぬる時は蠶座堆積し之れに眠際の蠶糞を混ずるが故よ夫れが爲め病原を惹起し蠶兒と損傷するに至るは實驗上免れざる所なれば就眠困難の場合には宜しく此所置を行ふを策の得たるものとす

第五齡摘要

四眠起中桑より蛻熟して上簇に至るまでを五齡と云ふ本齡に於ける注意は空氣の不足なきと蠶座の清潔なるとに外ならず即ち蠶兒も此期に至れば發育極度よ達し其体量孵化の當時に比すれば一萬倍の成長を見るよ至る故に食桑頗る多量よして之れに伴ふ糞沙の排泄亦甚尠からず爲めよ蠶座は濕潤或は蒸熱に傾き易く室内又鬱塞の氣あるを免れ難し特に曇天或は降雨の日にありては一層其甚しきを覺ゆべし故に糞沙は勉めて之れを除去し蠶座は清潔を要すべし又空氣の呼吸も稚蠶の際に比すれば頗る多量なるが故よ勉めて其新陳代謝を計るべし實よ完全なる蠶種よして完全なる保護をなし而かも尚其不結果を見るとあるは即ち發生後に於ける取扱の不適當なるより生ずるものにして之れ必竟多くは空氣の不足なるか炭酸瓦斯の過剩なるか若しくは冷濕或は蒸熱の爲めに侵さるゝものなれば本齡期よ至ては特に以上の諸點よ注意するは最肝要なるとす

枝葉を給與し蠶網を用ゐる事

四眠起蠶中桑の期に至らば蠶座上に薄く籾糠を散布し之れよ蠶網を布き其上に枝葉

を給與す其蠶網ハ茅(チガヤ)を以て之れを造り四眠起より熟蠶に至るの間に於て之れを使用するものゝとして裏拔及糞拔に供するのみならず餌桑を支へて稜沙と密接せしめざるの功あり斯く蠶座上ゝ籾糠を散布し茅網を布き後之れに給桑する所以ハ凡そ齡の何齡を問ハず起蠶の際は其蠶兒が脫却せる所の舊皮濕潤にして臭氣を帶び爲めに此際の蠶座は腐敗速なるものなれば其乾燥に注意を要し且給桑に摻酌を加ふべきハ第一齡摘要以後屢々示す所れ如し特ゝ本齡は彼が生長極度に達するの際なれば其脫皮の濕潤と臭氣とは特ゝ一層甚しきものなれば其儘直に給桑を行ふ時は餌桑は蠶座ゝ接觸し爲めに又濕潤腐敗の媒をなすの虞なきゝあらず玆を以て右の取扱をなすものにして斯くせバ起蠶忽ち餌桑を求めて網上ゝ出で快く喰桑をなす即ち濕潤の氣は糠に依て除去せられ網ゝ依て以て餌桑を支ふる故ゝ餌桑と稜沙とハ網の爲めに隔離せられ其間際ハ空氣能流通し脫皮及稜沙の乾燥又速にして蠶座ゝ濕潤を止め腐敗する等の患なく餌桑は清潔を得蠶兒の食慾爲めに愈進與し其成長肥大なる目前ゝ見もるが如し中桑より網上給桑三回を終り後起裏拔用意として又網を掛け給桑す此際蠶網二重となる而して網上二回の給桑を終り其未だ乾かざるに先ち其上網を擡げて別籠に移す斯くて稜桑ハ下網と共ゝ殘留し裏拔を終るべし

以後上簇に至る迄裏拔ハ日々一回宛之れを行ひ糞拔ハ一二回或ハ給桑の度毎之れを行ふべし(糞拔とハ網を擡げて別籠ゝ移し此際蠶糞を除去するを云ふ)斯くて七八日を經過すれば熟蠶の現ハるゝを見るべし

第九　上簇法

熟蠶上簇の事

蠶兒齡を重ねて五齡期に達するや後結繭して蛹と化し蛾と變じ蠶卵に至る迄永日間絕食するも生活に差支なき樣用意の脂肪及水分を十分体内に貯へなば玆に絕食をなし体内よりは殘滓を排泄して其体軀透明玲瓏となる之れを名けて熟蠶又ヒキゴと云ひ或ハ方言ズウと云ふ蠶兒此期ゝ至らば直に結繭となさんが爲め其適當の個所を求めんとし籠中を彷徨す即ち之れを拾ひ取りて簇ゝ移すべし此際注意を怠て若上げ或ハ蛾過ぎなのらしむべー若上とハ未だ蛾熟に至らざるものを言ふ即ち其期早きゝ過ぐ

れば上簇の後結繭迄に長時間を要するが故に蠶兒簇中より於て大に疲勞し且つ糞尿を洩すと多ければ爲めに汚繭を生すると亦多く動もすれば結繭に至らずして斃死するものあり又蛇過ぎと稱して其期遲きより過ぐれば贅絲を吐出するの弊あるのみならず簇より就くるも其働き遲鈍にして遂に良好の繭を結ぶと能わず或は徒に吐絲して其儘蛹に化するとあり早晩何れに失するも好結果を見るべからず然らば熟蠶上簇の適度如何と云ふに俗にハシリズウと稱して最初より於て熟蠶の現はれたる當時は其臀部を明き方に透し見て糞なきもの或わ一粒位を存せるものを撰びて上簇せしめ引續き盛んに熟蠶の現わるゝに至らば其糞一粒乃至二粒を存するものわ悉く拾ひて上簇せしむべし熟蠶の臀部より糞の有無を一々檢査して上簇せしむるわ稍繁雜れ嫌ありと雖ども斯わ只不熟練の内のみにて追々熟練せば一目して熟蠶と否とと判別し得べく隨て其手術速なるより至るべし

以上の如くにして拾ひ取りたる熟蠶わ直に之を上簇せしむるを宜しとす然るより往々熟蠶を拾ひ取りて之をゴザ上に蒔き散し置き又わ木鉢或わ盆等に堆積して其儘時を移すものあり如斯わ啻に蠶兒の健康を害するれみならず熟蠶は互に吐絲をなし相纏結するが故より之れをして簇中平均に蒔き込まんとするも一々分離して點々配置するを得ず或わ三三五五相結んで簇より落ち其落ちたるもの又互の吐絲より縛せられ簇中を徘徊し結繭をなすべき適好の場所を占むると不能終には居ながらにして繭を營み其局遂に同功繭及汚繭の多きを見るに至るべし故より熟蠶拾ひ取りを始むるや一方より於てわ間斷なく直に之を平等に簇より移すべし即ち嶋田簇にして一坪五十頭乃至六十頭を適度とす斯くするときわ熟蠶わ自在より簇中を徘徊して適好の個所と占め玆に初めて結繭を營むへし元來養蠶の業たる豊美なる繭を收め善良なる生絲を得るの目的に外ならざれば假令如何程飼育より注意し蠶兒は健全よして十分發育するも此機に臨て上簇の法を過らむ所謂九仞の功を一簣に虧くの愚と言はざるべかゝず勉めざるべけんや

簇仕立方の事

簇の用材種々わりと雖も其適好と認むるものは竹枝及藁の二者とす就中竹枝簇と成

繭の色澤品位と害ふと尠くして頗る良好なりと雖も其製作に甚手數を用ずるが故に多くは便宜の折藁簇(俗よ島田簇と云ふ)を使用す其製法簡單なる製簇器を用ひ粳藁の清潔なるもの五六十本宛を以て丈け四寸許りよ八重に屈折し之れを藁にて縛り置く此製作は冬期農事の閑なるときに於て行ひ乾燥せる個所に貯へ置くべし而して蠶兒上簇の期に際し簇の仕立方い先づ蠶籠に薄菰(二本綟りの藁繩を堅とし横)に藁一本を編みたるもの)を布き適宜の間を置きて之れに荒繩三條を縱に張り此繩を支ゆる爲め長三寸巾一二寸許の板片を前後の兩端に狹み以て繩を張り詰め嶋田簇を解きて其元より三折目を張繩に跨らしめ三條共に厚薄なき樣配列散在せしむ尤も其島田簇の個數い上簇籠の大小に依り異なるものなれば斟酌を加ふべし

上簇中注意の事

上簇後注意すべきの要點と擧ぐれば第一寒暖の一定第二明暗の平均第三靜肅第四清潔第五濕氣の過剩等にして即ち室内高温なるときい熟蠶い結繭を急ぐが故に自然纖維太くして粗惡の繭を營み又多く同功繭を結ぶに至るべく又低温なる時は徒に簇中を彷徨して容易よ結繭を營まず又結繭中と雖ども温度下降するときい之れを中止するとあるが故に室内温度は上簇れ當時い六十七八度より七十度位ならんとを要す然して熟蠶簇中を徘徊し適宜の個所を得八九歩通り巣隱を始めんとするに至らば漸次温度を進めて七十一度より七十四五度に達せしめ決して急劇の變動を感受せしむ可からず故に晝夜間斷なく温度の昇降よ注意すべく且つ上簇室内い稍薄暗きを要す若し明暗不平均なるときい片掛繭と稱して繭肉厚薄不齊のもれを生ぜべければ其明暗平均と要すべく又蠶兒の性質として靜を好み騷を嫌ふものにして特に結繭中い些微の音響にも驚懼し吐絲を中止し甚しければ之を絶つの虞なきよあらざれい勉めて靜肅を主とすべし尚室内は尤も清潔ならざるべからず若し不潔にして煤煙塵埃等の飛散するあれば忽ち成繭の品位を損し光澤の美を害ひ其結果や製絲に及ぼし住良の生絲を敗むる能いざるものなれば宜しく其清潔なると勉め而して濕氣の過剩い飼育中と仝じく言ふ迄もなく有害なるものなれば防濕の事も亦忽よす可からず

斯くて上簇後三日目にい概ね吐絲を終るものなれば四日目に至らば簇に風入と稱し

て當日午前八九時地上の水分發散し外氣の乾燥せるを計り周圍れ雨戸を全開して室内を明晰ならしむべし而して五日を經て六日目ゑ至らば蠶体最早蛹ゑ變化すべし茲ゑ於て繭掻取をなす

第十　繭蛹燥殺器及殺蛹法

繭蛹燥殺器ハ木製にして其丈四尺八寸二分横巾外法三尺方其底面を除くの外全体面は七八重の紙貼りしたるものなり器の上面中央ゑ三寸方の氣抜窓を穿つ（開閉戸を附し自在ゑ開閉す）前面下部より二尺一寸（此間中央ゑ六寸方の窓を設け開き上りたる所より上部は火て火炉炭火の摸様な見るに備ふ）除け蓋及繭箱と挿入するの個所にして巾二尺九寸丈二尺六寸二分の開閉戸を設くれ又前仝様紙貼りとす此開閉戸の中央に巾三寸丈五寸れ小窓を穿ち之れ又開閉戸を附し寒暖計及繭蛹水分の存否を檢ずるに用ゆ其内部の構造ハ下部二尺一寸上りたる所に火除げ障子（紙一重貼）を置く此間隙障子の下部より第一階棧の上面造一寸五分を除き以上内部二尺五寸を十階に區分し繭箱十個を挿入すべし繭箱と受くる第一棧の上面より第二階棧の上面に至る二寸五分内繭箱の高さ一寸八分間隙七分（内ゑ三寸の棧木を含有す）なり十階皆同じとす而して繭箱の巾ハ方二尺七寸八分五厘ゑし其中央縦に巾一寸の間隙を通して以て火氣の上騰循環ゑ便ならしむ箱の底面ゑハ三寸厚れ棧を入れ上ゑ障子を設け紙一重を貼り之れを底となし此上ゑ繭を並別す其繭の容量ハ各箱ゑ依て同じからず即ち上下ゑ在るものに多量を容れ中央ゑ至るに從ひ漸次少量を容るゝと左に示す如し

第一	生貫七百匁	第二	六百匁	第三	五百匁
第四	四百匁	第五	三百匁	第六	三百匁
第七	四百匁	第八	五百匁	第九	六百匁
第十	七百匁				
計	五貫目				

前器一回燥殺量は繭生貫五貫目を定量とし（然れども時に或ハ一貫目位の增減あり）之れに應用する炭量二貫四百匁を定量とす其他ハ燥殺繭一貫目を增減する毎に炭量も亦百匁を增減す而して火炉ハ土間へ縦一尺八寸横一尺二寸深さ三寸五分乃至四寸の穴を設け縦兩端中央

に方二寸の突出口を穿ち空氣の流通を便ならしむ此炉に木炭を縦列に積み重ね兩端突出口より煽し始め全体燼き盡し方に白灰の火面に掛らんとすると度とし炭火の間隙なき樣注意し火勢の減却せざる內急ぎ其薄灰を劇しく煽き去り直に其上に粳藁を拇指と中指とにて六握乃至七握りを限り之れを十束に別ち炭火の方向に前後より交々一束づゝ平均に燃し藁は赤く燃たるを度とし每回霧吹きをなし藁火を黒く消し炭となすべし（其白色に消ゆるハ宜しからず）然して其藁炭ハ互に交叉して炭火と密着せざるを要す已に藁を燃し盡したる後突出口の片邊に三升入位の鐵瓶に八分通り水を盛り之を掛け置く之れ蛹より水分は未だ發せざる前に於て火氣の急劇に繭に觸るゝを恐れ暫時間蒸發氣を用ゆるなり而して後火炉周邊と掃除し之れに燥殺器（但し繭箱を挿入せずして蓋のみをなしたる者）外箱を据へ凡そ十五分乃至二十五分間を經側面は窓を開き藁灰より發する瓦斯の去りしと改め且つ鐵瓶中湯の沸騰加減を見計ひ好度と認むる時直に繭を盛りたる繭箱を挿入して密閉し後蛹の死するを待て鐵瓶を炉の傍に取外ずし三時間を經て器內温度華氏百五十度に達し後又三時間を經て百六七十度に達せしめ第一回の燥殺を終る

右終れば器械の儘炉の傍に轉置し上下二個所の窓口を開き繭の熱氣を徐々に減却せしめ凡卅分間を經て後繭を取出すなり爾後第二回の燥殺を四日目乃至五日目となし温度ハ百四五十度にして四五時間又第三回を十一日目乃至十二日目となし温度ハ百二三十度にして三四時間（尤も二回の燥殺にて繭蛹充分乾枯し少しも水分を止めざるに至らば第三回を行ふに不及）にして蛹に聊も水分を存せず杓子形に能く乾枯するに至り初めて燥殺を終る

後編　實蹟筆記

本年の飼育ハ蠶室(瓦葺平屋)及居宅(茅葺二階造)並に附属室(板葺二階造)の三室にて之を行ひ其掃立總蟻量七十七匁五分ヨリして内白玉種七拾五匁赤熟種二匁五分なりしも本表ハ蠶室ヨリ於て飼育せる白玉種四匁ヨリ對し調査せしものなり

第十一　飼育受持主任者及生徒姓名

教　授　木村志滿

生　徒

第三期生　宮崎縣北諸縣郡都城町大字下長飯　野口堅助

第二期生　群馬縣多胡郡吉井町　高橋盛太郎

群馬縣南勢多郡粕川村大字深津	中嶋菅次郎	仝上
仝縣仝郡黑保根村大字宿廻	田沼貞作	仝上
埼玉縣秩父郡上吉田村大字上吉田	新井靚七	仝上
仝縣仝郡名栗村大字下名栗	鹽野又次郎	仝上
福井縣阪井郡坪江村大字前谷	土屋榮次郎	仝上
德島縣阿波郡八幡村大字大野嶋	須見信太郎	仝上
東京府北多摩郡谷保村大字靑柳	澤井良輔	仝上
茨城縣東茨城郡川根村大字南川根	道川丑三	仝上
佐賀縣東松浦郡唐津町大字魚屋丁	奥村みつ	仝上
埼玉縣兒玉郡本庄町	栗原つぎ	仝上
仝縣秩父郡太田村大字太田	富田福藏	仝上
仝縣比企郡唐子村大字下唐子	戸井田久太郎	仝上
仝縣仝郡野本村大字下野本	吉原範平	仝上

第一期生

埼玉縣北企郡野本村大字押垂　柴生田與四郎
全縣北埼玉郡禮羽村大字長田　木村澤次郎
全縣全郡志多見村大字平永　矢澤政次郎
全縣兒玉郡青柳村大字新宿　木村林三郎
群馬縣南甘樂郡神川村大字萬塲　大野仙重
全縣南勢多郡粕川村大字深津　猪熊謙次郎
全縣全郡横野村大字宮田

全上
全縣全郡全村大字全上　角田直次郎
全上　津久井定平
全縣全郡芳賀村大字嶺　田所福太郎
全縣全郡黑保根村大字宿巡廻　田沼榮之助
全上
神奈川縣愛甲郡荻野村大字下荻野　小林升
全上
全縣足柄上郡山田村　野村忠吉
全上
全縣橘樹郡稻田村大字中野鳴　井田守三
全上

全縣足柄下郡小田原町　齋藤清之助
同上　靜岡縣富士郡富丘村大字大中里　渡井爲次郎
同上　全縣佐野郡東山口村大字伊達方　鈴木正一
同上　栃木縣安蘇郡田沼町大字杓本　矢島啓
同上　茨城縣行方郡立花村大字八木蒔　今泉德之助
同上　全縣眞壁郡長讃村大字宮后　岡本藤吉
同上　京都府北桑田郡弓削村大字上中

同上　群馬縣邑樂郡高島村大字秋妻　高乘增太郎
同上　埼玉縣兒玉郡本庄町　岩崎千造
同上　戸塚たゝ

催青期

華氏寒暖

日次項目	月日	晴雨 朝	晴雨 晝	晴雨 夕	室內 朝	室內 晝	室內 夕	室外 朝	室外 晝	室外 夕	六坪六合五勺一室用炭量
初日	四月十六日	晴	仝	仝	六〇度	六四	六四	四六度	七二	六二	○
二日	四月十七日	晴	仝	仝	六一	六三	六四	四二	六五	六〇	○
三日	四月十八日	曇	晴	仝	六四	六五	六五	五〇	七〇	七一	○
四日	四月十九日	曇	仝	仝	六五	六八	六九	五三	七〇	八五	午後六時二貫五百匁
五日	四月二十日	曇	仝	仝	六四	六五	六六	四一	六六	三四	仝一貫三百匁
六日	四月廿一日	晴	仝	曇	六五	六七	六八	五三	七七	四二	仝一貫五百匁
七日	四月廿二日	曇	晴	曇	六七	六八	六七	四五	六五	三五	仝一貫五百匁

八日	四月廿三日	曇	仝	雨	朝六六七	夕六六九	朝四六九	夕五五二	仝	一貫百匁
九日	四月廿四日	雨	晴	仝	仝七六	仝六七	仝六四	仝五六	仝	一貫二百匁
十日	四月廿五日	曇	仝	仝	仝六	仝七	仝五	仝六	仝	一貫三百匁
十一日	四月廿六日	雨	仝	仝	仝七	仝七	仝六	仝五	仝	一貫三百匁
十二日	四月廿七日	雨	仝	仝	仝七	仝七	仝七	仝六	仝	一貫四百匁
十三日	四月廿八日	雨	曇	仝	仝七	仝七	仝五	仝六	仝	一貫四百匁
合計	○	○			朝八六四度 晝八八七度 夕八八七度		朝六七九度 晝八七四度 夕七八五度			十四貫五百匁

第十二　催青期

四月十六日　（催青第一日）

當日晴天西北風あり午前五時外温の蠶種運搬に適せるを見計ひ兼て本庄町日本蠶種貯藏株式會社貯藏庫内に貯藏したる蠶種を取出し（該種ハ本年一月十五日と以て入庫せたるものなりして貯藏日數九十二日間）之を持歸り用意の催青期に收め催青室内目通の所に据へ置く該催青室ハ已に本月十日以前に於て一回の煤掃と行ひ駒返し天井上より床下等に至る迄悉く清潔に洒掃をなし火炉及床下火鉢等の灰を取出し天日に曝らして能く乾燥せしめて後之れを篩にて通し再び火炉及火鉢に收め仝十二日より十四日に至る三日間天井に薄莚一重を敷き又火炉及火鉢ハ十分埋火をおし戸障子高窓等を悉く密閉し室内をして日々七八十度の高温ハ至らしめ床下及室内ハ勿論柱壁等に至る迄毫も濕氣を留めざる樣飽まで乾燥せしめ仝十五日に至り初めて戸障子及天井莚高窓等を開放し外氣を通じて室内ハ鬱滯せる腐陳の氣を排除しめ尚火熱の氣なからしめ火力を用ひずして適温を保つ樣之れが準備をなし置きたるものなり而して蠶種ハ此室に移したる際内温六十度

なりゑが正午に至り外温の上昇するに從ひ室内亦高温に向ハんとす依て内障子を開き天上莚中央三尺方許を剝ぎ催青器を下部に卸し床上五寸許の所ゑ置く日没後に至り外温下降するに從ひ天井莚を蓋ひ續て内障子を閉ぢ高窓を閉づる等の取扱をなし内温の下降なきを勉む午后十二時六十一度を保てり

四月十七日　（催青第二日）

今朝快晴ゑゑて外温下降し稍冷氣を覺ゆ然れども室内はハ前夜來の注意に依り依然六十一度を保てり午前三時外温四十度に下降し室之内れが影響あらんとを慮り直に天井莚を悉く二重とし（平常ハ蠶棚の上と二重とし扱場の上ハ一重と布き置く）催青器を舊位に復し目通の所ゑ置く幸にして内温の下降を見ず午前六時南北雨戸と開き次ぎゑ高窓を開く仝十時天井莚中央を一重となす正午ゑ至り外温稍上昇す然れども室内著しき昇温を見ず午后一時催青器内の蠶種を上下ゑ差替へをなす（以後毎日此取扱をなす之れ蠶種をして其催青を一齊ならゝゑむる爲なり）午后六時高窓を閉ぢ仝七時南北雨戸を閉づ夜ゑ入り曇天となり内温に著しき變動を見ず

四月十八日　（催青第三日）

今朝天氣尚晴れず且つ無風にして外温に著しき下降と見ず室内ハ容易く定温を保てり午前七時高窓を開く仝九時頃より晴天となり外温漸々上昇に向ふ室内ハ爲めに清涼を求むる爲め天井莚中央を適度ゑ剝き去り且内障子と開き二階上欄間を外し以て定温を超へざるを勉め終始六十五度を保てり日没後ゑ至り追々外温下降ゑ向ふを以て二階上なる欄間を箝む午后八時に至り天井莚を蓋ひ内障子を閉ぢ暫くして高窓を閉する等室内温度の下降せざるを勉む午后十二時ゑ至るも内温依然六十五度と保てり

四月十九日　（催青第四日）

午后一時頃より曇天となり外氣頗る冷涼を覺ゆ此時天井莚を二重にし寒氣の室内に感せざるを勉む午前七時頃より漸々外温上昇ゑ向ふ依て高窓と開き暫時ゑゑて天井莚を一重となゑ内障子を開く正午に至り室内稍蒸熱の氣味あり之れか防禦に注意す本日ハ始終曇天にして濕氣來襲の虞れあるのみならず已に催青四日目にして定温も稍高度ゑ至るが故に保温防濕の用意として午后六時ゑ至り炭火を火炉及床下火鉢に分

理す夜間よ至るも尚晴れず仝八時に至り高窓及内障子を閉ぢ後幾分の火氣を用ひて防濕の注意をなす午后十二時内温六十六度を保てり

四月二十日　（催青第五日）

前夜來曇天よして風無く爲めよ内温又激變なし午前五時南北雨戸を開き暫くして高窓を開く仝七時頃より小雨降り十一時半よ至りて歇む午后六時埋火をなし續て雨戸を閉ぢ暫時よして高窓を半閉す本日は小雨降り或い曇天よして爲めに外温亦高からず室内は幾分れ火力を用ひて定温を保つに容易なりき夜に入り内外共に激變なく只濕氣の來襲と防ぐよ注意したるのみ

四月廿一日　（催青第六日）

朝來快晴よして北方の疾風あり午前五時雨戸を開き仝六時高窓と開く仝八時天井莚中央を少しく剝ぎ次ぎよ内障子を開く午前十時過より追々昇温に向ふ依て火炉の掛灰を厚く去發温なからしめ尚南北床下氣管を開く正午外温七十四度の高きよ至る然れども室内い豫て注意せしを以て稍定温を保てり仝五時氣管を閉ず午后六時過より曇天となる即ち炭火を增埋し續て障子を閉す仝七時高窓及雨戸と閉し天井莚を蓋ふ仝十時より外温益々下降して四十九度となり尚下降の傾あり因て天井莚を二重にし催青器を高階に移す仝十二時明朝の寒冷を慮り火炉掛灰を薄くし發温と補ふ

四月二十二日　（催青第七日）

朝來曇天近日稀有の寒冷よして午前二時外温四十五度に降る室内い前夜來保温れ注意を怠らざりしを以て定温と降らざるも仝三時頃に至り稍下降に向いんとす因て又炉火掛灰を薄くし發温を補ふ午前七時頃より追々晴天となり仝時東方の軟風あり日中内外共に平温にして激變なく午后五時再び曇天となる仝六時埋火を行ふ仝十二時に至るも内温に異變なし明曉の寒冷を慮り炉火掛灰を薄くし發温を補ふ

四月廿三日　（催青第八日）

前日來曇天引續き爲めよ外温寒冷なりと雖も室内い注意したるが爲め定温を保てり午前六時頃より追々内温上昇せんとするを以て内障子中央一本を開く仝七時に至り高窓を開き天井莚中央を一重となす仝八時に至り催青器底面に蛇腹切（其法前編に詳なり）を行

ひ且つ其左右側面の上部を竪一寸許横に紙を切拔き窓を穿ち以て蠶種よ空氣の感觸を去て滑かならしむ午后三時頃より雨降る室内稍蒸熱の氣味あり即ち火炉の掛灰を薄くし火力を利用して以て空氣の交替を計る仝六時埋火をなし夜十二時に至る迄内温六十八度と保てり此時降雨尙歇まず

四月廿四日　（催青第九日）

前夜來降雨歇まず爲めに冷濕と覺ゆ午前一時高窓を閉し炉火の掛灰を薄くし火力を籍り防濕の手段を怠らず午前八時雨歇み晴天となる即ち高窓及内障子を開き暫くして天井莚中央を適度よ剝ぐ午后二時に至り外氣七十二度に上昇し室内は清涼を求むるに注意怠らざりしを以て七十度を上らず仝五時より北風あり仝六時埋火をなす仝七時曇天となり外温五十二度に下り尙下降の傾あり即ち高窓を半閉よし續て雨戸を閉ぢ天井莚を蓋ひ内障子を閉づる等專ら保温に勉む夜十二時外温五十度内温六十九度を示せり

四月二五日　（催青第十日）

前夜來曇天東方の和風あり正午よ至る迄内外共よ著しき温度の下降を見ず午后に至るも外温高からず爲めよ室内は幾分火力を用ひて適温を保てり午后六時炭火を增埋し夜十二時よ至る迄内氣に著しき變動を見ず容易く定温を保つとを得たり本日蠶種を檢するに最早膨張して黙々卵面青色を催せるものを認む

四月廿六日　（催青第十一日）

午后一時頃より降雨霏々たり爲めに外氣頗る冷氣を覺ゆ室内い前夜來保温の注意を怠らずして定温を下るの患なし然れども濕氣來侵の虞れあるが故よ午前四時炉火の掛灰と薄くし高窓を半開に去火力を利用して防濕の注意をなす日中よ至るも降雨尙歇まず從て外温又上昇せず室内も絶へず防濕い爲め幾分の火力を利用し定温を保てり夜よ入りても内温に變動なし本日蠶種い卵面稍一齊よ催青し孵化の期遠からざるを示す

四月廿七日　（催青第十二日）

前日來降雨尙歇まず濕氣の來襲せんとと虞れ之れが防禦よ注意すると概ね前日に異

らず本日ハ已ヨ卵面十四五頭の發蟻ありしを認む方言之れを蟲渡りと云ふ午后六時埋火をなし夜ヨ入るも温度に變動なく飽迄防濕の注意を怠らざるのみ

四月廿八日　（催青第十三日）

引續き降雨尚歇まず午前七時に至り上温の氣味あるを以て内障子南北共一本を開く正午十二時雨漸く止み北方の軟風起る此時高窓を全開し尚幾分の火氣を用ひ以て防濕に備ふ本日ハ蠶種の催青悉く一齊し卵面已に一分通りの發蟻を見る而玄て此發蟻は廢棄して之れを飼育せず即ち午后一時掃捨をなす方言之れを虫掃と云ふ仝六時埋火をなす仝八時頃より稍冷氣に向ふ依て高窓を半閉にす明日ハ方ヨ掃立に至るを以て特ヨ保温ヨ注意し室内ハ火力を利用して終夜七十三度を保たしめたり

本日を以て催青期を終る

第一齡表

（白玉種正　蟻量四匁）

項目 / 飼育日數	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	蟻量四匁ニ對スル用炭量	給桑時間 午前	給桑時間 午后	手入	一坪平均給桑量	一日給桑總量	給桑籠數及坪數	用桑名	桑篩目	剉桑歩
一	四月廿九日	朝晝夕	七二 七三 七三	五六 六六 六二	午后六時 六百匁	十二、 三、半 六、十、	午前十一時 下蟻 四匁	二匁五分	五十六匁 一分	百五十一匁二分五	一籠 五坪五分	桑 早多 胡 七年木	二分五厘 巾五厘 長二分	目
二	四月三十日	仝曇 仝 仝	七〇 七四 七三	五五 六八 六〇	仝 六百匁	二、半 三、半	午前十時半 入	二匁五分	百五十一匁二分五厘	二百三十匁一分	三籠 二十二坪	仝	一分八厘 巾六厘 長三分五厘	目
三	五月一日	仝曇 仝 仝	七三 七〇 七〇	五三 六五 五四	仝 七百匁	三、半 八、十二、 四、八、	午前九時半 入	二匁六分 三厘七	二百三十匁一分	三籠 二十二坪	五籠	仝	二分一厘 巾七厘 長六分	目
四	五月二日	仝晴 仝 仝	七一 七〇 六九	四一 六八 六二	仝 七百匁	一、四、九、 一、四、九、	午前六時半 抜	二匁六分 八厘	五百八十匁 九匁六分	五籠 四十四坪	仝	仝	二分四厘 巾八厘 長七分	目
五	五月三日	仝晴 仝 仝	七二 七四 七三	四五 六五 五八	仝 六百匁	一、四、十三、 四、八、	〇	二匁七分 五厘	六百〇五匁	仝	仝	仝	二分七厘 巾九厘 長八分	目
六	五月四日	仝雨 仝晴 仝	七三 七四 七一	五三 六一 五五	仝 六百匁	一、四、九、 五、十一、	午前四時半 同十時半 午後十二時半	二匁六分 五厘	五百八十匁 三匁	仝	仝	仝	三分 巾一分 長九分	目
七	五月五日	仝晴 仝 仝	七一 七五 七九	仝 六三 六七	仝 五百匁	〇	〇	〇	〇	〇	仝	仝	〇	

平均							
一飼育時間合計	百三十三時間	二匁六分三厘八	三百六十九匁五分〇八				
一眠中時間	二十八時間						
一給桑回數合計	三十二回						
一桑量合計	二貫二百十七匁〇五厘						
一室內寒暖合計	朝五〇二度 畫五一二度 夕五〇八度						
一室外寒暖合計	朝三五八度 畫四六三度 夕四二四度						
一炭量合計	四貫三百匁						
一眠蠶百頭量	一分四厘五毛						

（備考當場蠶籠ハ長四尺巾三尺二寸五分にして尺方面十坪を使用す）

第十三　育養法

第壹齡

四月廿九日（掃立當日）

前夜來冷氣なりしが拂曉ヨ至るに從て益寒冷となり外氣ハ五十六度に降る高窓半開なるものと密閉し炉火の掛灰を薄らげ發温を謀る等室內保温ヨ注意すると間斷なかりしを以て終始定温を保つを得たり午前四時蠶種を紙に包み蠶籠に載せ蠶架目通れ所ヨ挿し置く（此扱方前編に詳なり）（午時俄に曇天となり小雨を催す午六時歇む然れども全く晴れず室內稍蒸熱の氣味あり因て高窓及內障子一本を開き火力を利用し室內空氣の交替を謀る今日は豫定の如く掃立ヨ際するを以て午前十一時正式の掃立手順（掃立法前編ヨ詳な）を終り後蟻量を撿し水分一劃二歩を減し正蟻量四匁を得是れと五坪半に擴げ巾五厘長二分の剉桑を一坪に對し二匁八分の割合を以て給與す之を居並桑と云ふ午后六時炭火六百匁と增埋す午七時高窓及內障子を閉づ夜に入り冷氣漸々に加ハるを以て專ら温保の手段を盡す

四月三十日　〔自掃立二日目〕

引續き曇天午前一時より北風起り外氣ハ寒冷にして五十二度に降り從て内温亦下降の傾あり依て火力を利用し最保温に注意す今日亦前日の如く晴曇定まりなく稍鬱蒸の氣味あり午前六時内障子を開き仝七時高窓を開き次て天井莚中央三尺許を剝ぎ又火炉掛灰を薄くし發温を謀り室内空氣の交替と求む本日は掃立より二日目なるを以て午前十時手入〔手入法前編よ詳なり〕をなし其坪數を倍して十一坪となす午后四時俄然黑雲群疊して降雨と催す暫くして北方の疾風起りしが忽にして雲散し風止む午后六時埋火を行ふ仝七時高窓と閉ぢ天井莚を蓋ふ後南北雨戸を閉ぢ仝八時内障子を閉づ仝時降雨ありて頗る冷氣を覺ゆ然れと室内ハ注意怠らざるに依り終始七十三度を保持す仝八時半雨歇む仝十二時内温ハ異變なし

五月一日　〔自掃立三日目〕

本日も亦寒冷にして早天より晴曇定まりなし午前九時東北の疾風冷濕を帶びて來る因て之れが防禦をなすに怠らず暫時にして風止む日中曇天の爲め室内鬱蒸の氣味あり仝時高窓を半開にし續て内障子一本を開く等專ら手段を盡す午前九時手入をなし其坪數倍して二十二坪に增席す午后六時炭火を增埋す仝七時頃より室内温度下温れ傾あり因て雨戸高窓を閉ぢ天井莚を二重となす午后八時内障子を閉す仝時微雨ありしも忽ちよして歇む仝十二時内温七十度と保てり明曉の寒冷を虞り火炉掛灰を薄くし發温を補ふ本日は蠶体頗る生長し皮膚ハ白色を現ハし所謂毛振を了せり

五月二日　〔自掃立四日目〕

早天快晴寒冷最强く午前十一時外温を檢するハ四十八度に降る室内ハ前夜來注意ゑたるが爲め七十度に保持すると雖ども稍下降の傾あり依て天井莚二重なるもれを增して三重とし又炉火の掛灰を薄らく等一層れ注意を加へたるか爲め仝三時頃迄尚七十一度を維持せり時に外氣は四十一度の低きに降り掃立以來未曾有の寒冷なり今朝給桑に際し桑貯藏場の寒冷甚しきに因り給桑前凡そ三十分間許り恰好の温度を有する室内ハ入れ置き其冷氣の稍去るを待ち始めて給桑せり曉天太陽の上ると待ち徐々ハ雨戸を開き天井莚一重通りを剝ぐ本日ハ掃立より四日目なるを以て午前六時紙拔

をなし（紙拔の法前編に詳なり本年度い糠入をなさずし）て直に之を行ふの法よ依れり是亦前編に悉し（二十二坪のものと倍して四十四坪に增席す仝時頃より東方の和風ありしが午后四時よ至りて止む仝六時埋火をなす日沒後よ至り下温の傾きあり因て之れが注意を怠らず午后十二時內温依然六十九度を保てり

五月三日（自掃立五日目）

早天快晴寒氣甚玄午前三時外氣四十五度に降る室內注意畧前日に同し爲めよ終始七十二度と維持せり太陽の昇るに從ひ高窓を開き天井莚扱塲の上を一重となし次に內障子中央を開く午前九時頃より曇雨を催し從て又冷氣と覺ゆ仝十一時快時よ復す日中外温に激變なく室內亦平温を保てり午后六時炭火を檢するに殘量僅少なるを以て新に六百匁を增埋す夜に入り滿天墨を流せる如く暗黑とあり俄然降雨を催し頗る鬱蒸の氣あり因て高窓及中央內障子を閉ぢず火力を利用し以て之れが防禦を謀る本日蠶兒い眠前大食部に入り食慾增進し成長著しきを見る

五月四日（自掃立六日目）

早天暗黑よして濕氣强く室內尙蒸熱の氣味あり前夜來火力を利用し勤めて室內空氣の交換を謀る午前一時頃より降雨となり雨勢漸次强さを加へ東北の疾風之れに供ふ拂曉に至るに從ひ冷氣を覺も即高窓と半閉にす午前四時よ至り蠶兒を檢するに已に皮膚上に十分光澤を現いし一坪に對し一二頭淡黃色よ變玄催眠に迫れるものを認む因て糠入の好時機と認め直に眠裏拔準備として糠入をなす仝時よ至り小雨となる仝九時糠上二回の給桑を終り仝十一時眠裏稜（ボッチ）擴げをなす（其方法前編に詳なり）午后一時雨歇を風收る仝六時新よ炭火六百匁を增埋す夜追々冷氣よ赴くを以て高窓及雨戸を閉づ午后十二時（ボッチ）上第二回の給桑を終る此際蠶兒い概ね就眠し食を求むるもの稀なり因て之れを止桑となす

五月五日（自掃立七日目）

朝來晴天無風にして靜穩なりと雖も寒冷にして外氣五十五度よ下降せり因て室內保温の注意怠りなし午前七時未だ就眠せざる蠶兒を拾ひ取りて廢棄す其頭數一籠に付四十七八頭の上よ出でず仝八時頃より温度上昇の傾あり高窓を全開し次て炉火の掛

灰を厚ふし發温を減退せしめ室内障子を開放す仝十時天井莚中央一枚通を剝き去り仝時ゟ氣管を開き暫くして二階上欄間を取外づし以て昇温の防避ゟ備ふ正午に至り外温を檢するに七十九度の高きゟ至り已に八十度ゟ垂んとす本日ハ就眠期なるを以て定温を越ゆるを忌むか故に室内は屢水布を用ひ洒拭を行ひ其他注意の手段盡さゞるなく勉めて清涼を求むるゟ怠らず午后四時氣管と閉ぢ欄間を箝め仝六時埋火となし仝七時頃より内障子天井莚等を舊ゟ復す仝十二時に至る迄内温に激變なし

本日を以て第一齡を終る

因ゟ記す蠶室高窓雨戸氣管欄間東西の開き戸及天井莚等ハ日々外氣の如何に應し臨機應變れ斟酌を加へ之れを取扱ふものゟして極めて煩雑なれば本表中或は其取扱の記載を畧したるものなきを保せす又雨戸の如きも單に夜間のみ閉塞するゟあらず風雨甚しきとき或ハ朝曦夕陽れ直射して室内高温に赴くを避くる等の時に當てハ日中と雖とも往々之れを閉づることあれども一々其取扱を記せざれば宜しく時ゟ臨んで斟酌を加ふべし

第一齡表

項目／飼育日數	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	蟻量四匁ニ對スル用炭量	給桑時間	給桑時間	一坪平均給桑量	一日給桑量總	籠數及坪數	用桑名	桑篩目
						前	後	入				歩
八	五月六日	朝晴 晝仝 夕仝	七三、五八、七六、七八、	六二、六一、七四、六七、	午後六時 四百匁	四、十一、	三、半五、九、十三、	午前四時中 桑午後九時糠入	二匁七分五厘	七百二十六匁	早桑四十多胡巾七年木	三分五厘目巾一分長九分
九	五月七日	仝	七四、六七、七二、五四、	七二、六一、七四、六七、	五百匁	四、八、	一、四、九、	午前一時起 裏秡	二匁八分	九百二十四匁	七籠六十六坪	四分目巾二分五厘長一寸
十	五月八日	仝	七三、五四、七四、六一、六一、	七〇、五六、七四、六四、	五百匁	三、五、十二、	四、十一、	午前五時糠入 午后二時中裏拔	三匁〇二厘	一貫百二九十九匁四八分八厘	八十八籠坪	四分五厘目巾一分八厘長一寸
十一	五月九日	仝雨 仝曇 仝曇	七〇、五六、七四、六四、五九、	七二、五五、七三、六二、六三、	五百匁	四、九、 二、十二、	九、	午前九時糠入 午后四時眠裏拔	三匁	一貫〇五十六匁	仝	五分目巾二分長一寸二分
十二	五月十日	仝曇 仝 仝	七二、五五、七三、六二、六三、	七二、五五、七三、六二、六三、	五百匁			午前九時止 桑	二匁六分	二百二十八匁八分	仝	五分五厘目巾一分八厘長一寸二分
平均	〇	〇	七四、三六六、六六〇、八	七三、〇五六、八	四百八十匁			〇	二匁八分三厘四毛	八百十三匁	〇	〇

一飼育時間合計　百〇一時間
一眠中時間　二十八時間
一給桑回數合計　二十一回
一桑量合計　四貫〇六十四匁二分八厘
一室内寒暖合計　朝三六〇度　晝三七一度　夕三六八度
一室外寒暖合計　朝二八四度　晝三三三度　夕三〇四度
一炭量合計　二貫四百匁
一眠蠶百頭量　七分二厘

第二齡

五月六日（自掃立八日目）

本日早天快晴なりと雖ども前日來暑熱の爲め室内暖氣を帶び稍蒸熱の氣味あり勉めて室内清涼を求む拂曉より及て稍寒冷となる然れども内温定度を下るに虞なし午前四時蠶兒を檢するに既に概ね蛻皮をなし運動活潑にして餌桑を求むるの狀切なるが如し依て中桑を與ふ正午無風にして暑熱强く外氣七十八度に上昇す室内之れが豫備として兼て高窓及南北内欄間を開き續て内障子及氣管を開き天井莚を剝ぐ等防避に怠らざりしも外氣に伴ふて七十六度に達せり仝五時氣管を閉ぢ仝六時埋火をなす此時より曇天となる依て漸次欄間を閉し高窓を半開にす仝九時起裏稜用意として糠入をなし仝十二時糠上第二回の給桑をなす此際天氣尙晴れず室内稍蒸熱を覺ゆ爲めに之れが防避に注意す

五月七日（自掃立九日目）

朝來曇天降雨の摸樣あり午前一時起裏扱をなし其坪數前齡の五歩出しとし六十六坪

よ増席す午前六時より降雨あり仝八時よ至り室内に蒸熱の氣あるを以て高窓を開放し之れが注意を怠らざ午后四時よ至り雨止み又降り又止み殆んと定りなし仝六時埋火をなし利用して空氣の交代を謀る夜に入り七十二度を保てり仝十二時降雨尚止まず

五月八日　〔自掃立十日目〕

前日來降雨未だ止まず爲めよ室内濕氣増嵩の恐あり因て火力を利用し之れが防禦に注意午前五時中裏稜準備と玄て糠入をなし仝十一時糠上第二回の給桑を終り午后二時中裏拔をなし其坪數を増玄て八十八坪となす午后六時埋火をなゑ暫くにして雨止む夜に入りての取扱ひ畧前例よ仝玄本日蠶兒は二齡れ成長極度よ達し食慾増進して著しく眠期の近きを見る

五月九日　〔自掃立十一日目〕

曉天又降雨あり午前八時に至りて止む然れども尚晴ならず此時和風ありて或は歇み或い起る午前九時蠶兒を檢するに已よ皮膚上眠色を現はす因て糠入の好時機方に熟せりと認め眠裏稜準備れ爲め糠入をなす午后四時糠上二回の給桑を終り仝五時に至り眠裏稜〔ボッチ〕擴げを行ふ仝時頃俄に滿天晴雲を來し雨濕と帶ひたる東南の疾風起る午后六時埋火をなし夜に入り室内防濕保温の注意前例よ因り勉めて油斷する所なし午后十時に至り風止む

五月十日　〔自掃立十二日目〕

前日來曇天冷氣强しと雖も室内は前夜來火力と利用玄定温を保てり爲めに幾分火氣の鬱滯を慮り空氣の新陳代謝を計る午前九時〔ボッチ〕上二回の給桑を終る此際蠶兒い概ね就眠せり即ち之を止桑となす午后五時未だ就眠せざる蠶兒を拾ひ取りて廢桑す其頭數一籠に付三十五六頭の上よ出でず仝六時東北の疾風起り忽ちよして止む此時埋火をなす本日は眠中なるが故に温度の變動濕氣の來襲とを防避するよ怠らざりゑ高窓天井莚等の扱前例に仝じく温度い始終七十二三度の間を昇降せり

本日を以て第二齡を終る

項目／飼育日數	月日	晴雨	華氏寒暖 室内	華氏寒暖 室外	蠶量四匁ニ對スル用炭量	給桑時間 午前	給桑時間 午後	一坪平均給桑量	一日給桑總量	籠數及坪數	用桑名	掃桑目歩
十三	五月十一日	朝晴 晝曇 夕全	七一 七二 六二	五三 六四 六〇	午後六時五百匁	一、八、		午前一時中桑	三匁	五百二十匁	九籠 八十八坪	早桑 六分目 胡巾 二厘 長一分二厘
十四	五月十二日	全曇 全 全	七〇 七二 七二	五七 六一 六	全五百匁	一、六、 三、五、	十二、十一、	正午十二時糠入 午后三時赴裏稜	三匁三分二厘八	二貫〇五十匁〇四	十四籠 白三十坪二	全
十五	五月十三日	全晴 全 全	七二 七七 七四	五四 七五 六四	全五百匁	五、十、 三、十、		午后十時糠入	三匁五厘	一貫八百四十八匁	全	全
十六	五月十四日	全曇 全晴 全曇	七二 七五 七二	五三 六九 六四	全四百匁	四、九、 二、七、十一、		午前六時中裏拔	三匁六分七厘	三貫〇六十八匁一分二厘	十八籠 百七十六坪	全
十七	五月十五日	全曇 全 全	七二 七四 七四	五八 六四 六一	全四百匁	五、九、 四、十一、		午前五時糠入 同十時眠裏拔 午後十一時止桑	三匁九分	二貫七白四十五匁六分	全	同巾三分 長一寸三分
十八	五月十六日	全晴 全 全	七三 七六 七二	六五 七二 六二	全四百匁							
平均	○	○	七一、六八、三 七四、三六七、五 七三、〇六二、〇		四百五十匁	○		○	三匁四分七厘九	二貫〇四十七匁九分五厘	○	○

一飼育時間合計　百〇六時間
一眠中時間　三十時間
一給桑回數合計　二十一回
一桑量合計　十貫二百三十九匁七分六厘
一室内寒暖合計　朝四三〇度　晝四四六度　夕四三八度
一室外寒暖合計　朝三五〇度　晝四〇五度　夕三七二度
一炭量合計　二貫七百匁
一眠蠶百頭量　三匁九分三厘

第三齡

五月十一日〔自掃立十三日目〕

朝來陰雲漠々たりしが午前六時頃より天晴れ雲散し昇温の傾あり因て炉火の灰を厚うし發温を減退せしむ忽ちして又陰雲起り殆ど半晴半曇の間にあり加ふるに東方疾風ありて或は歇み或は起り變遷極りなし室内空氣の流動最緩漫なるが如く且蒸熱の氣あり因て再び火力を用ひて之れが流通を求め防濕れ注意等瞬間も忽ゑせず午后一時頃蠶兒は概ね起揃ひ脱皮せざるもの一籠中僅に十二三頭内外にして活潑ゑ蠢動して食を求むるの狀を呈す依て中桑を與ふ仝六時理火を行ふ夜に入り内外温度に激變なき仝十一時雨戸を閉づ十二時内温七十二度を保てり

五月十二日〔自掃立十四日目〕

前日來引續き曇天にして今朝和風あり室内頗る鬱塞の氣味を覺ゆ因て早天内欄間を外づし火力を利用ゑて室内空氣の交代を計る正午十二時起裏板用意として糠入をなし後二回の給桑を終り午后三時起裏拔をなゑ八十八坪なるもの五歩出しとし百三十

二坪に分席す此際より至り全く快晴となる明朝の寒冷を慮り高窓を半閉まし内欄間を箝む暫くまゝにて天井莚を蓋ふ本日迄は給桑の切歩を短冊切と稱して長方形より剉み篩と以て之れを給したりゝが本日糠上の給桑より三角切と稱し鱗形より剉み篩の使用を廢して手まて之と給與す

五月十三日（自掃立十五日目）

晴天午前一時外温五十四度に降る内温の下降せんとを虞れ炉火の掛灰を薄くす午前五時より冷氣を帶びたる西方和風あり漸くまして疾風となり全六時に至りて止む全八時東北の軟風起る日中外温頗る上昇の傾あり因て全時に高窓を全開ゝ天井莚を適宜まに剝き次て炉火の灰を厚くゝ以て發温なからしむ全十一時まに至り南北氣管を開く正午果して外温七十五度に至り内温ハ之れまに伴ふて最高七十七度まに達す午后四時西風に變せり全時氣管と閉ぢ全六時埋火を行ふ全十時中裏扱用意として糠入をなす此時風全く歇む夜に入り高窓を半閉し天上莚一重と覆ひ暫時にゝて内障子を細目まに閉ず

五月十四日（自掃立十六日目）

曇天無風まゝて靜穩なり外温最低五十三度まに至る然れども内温七十二度を保てり午前六時中裏扱をなゝ百六十七坪に増席す全七時頃より東風ありて或ハ疾風となり全九時高窓及内障子を全開す正午十二時まに至り晴天となり又忽ちまして薄曇となり午后六時埋火を行ふ全七時高窓を閉ぢ續て内障子を閉ず本日蠶兒ハ已に本齡の大食期に入り食慾盛にして眠期の近ぎを示す夜に入り内外温度まに激變なく共まに平温なりき

五月十五日（自掃立十七日目）

朝來曇天午前五時細雨降り暫くまして歇む全時蠶兒を檢するに体軀大に肥滿し眠期の態を催ゝ眠色既に迫る即ち好時機と認め眠裏秡準備として糠入をなす全五時半頃朝より東方の微風ありしか暫くにして歇む全九時糠上二回の給桑を終り全十時に至り眠裏拔〔ボッチ〕擴けをなす午后三時より又細雨ありしか全五時まに至りて歇む全六時埋火をなす全十一時頃より西方の疾風起る全時〔ボッチ〕の乾桑適度を見計ひ第二回の給桑をなす〔ボッチ〕上の給桑は二回共まに短冊切となして給桑す此際蠶兒は概ね就眠して食を求むるも一坪中平均十一二頭あるのみ本日室内は終始適温と保ちしに依り氣候取扱上格別の手數を要せず

五月十六日　〔自掃立十八日目〕

前夜來西風尚歇まず加ふるに午前二時頃より又降雨あり暫時にして歇む爾後快晴に向ひ拂曉に至る迄外氣は六十五度を降らす從て內溫も異狀なく七十二三度の間なり仝四時未だ就眠せざる蠶兒を拾ひ取りて廢棄す其數一籠に付三十頭れ上に出てず仝五時より和風起りしが風勢益々加わり暴風となる而して其方向も或ひ東より來り或ば西よ變ず更に定りなく殆んと旋風の如し室內空氣の流動其烈きを覺ゼ本日ハ眠中なるを以て眠蠶よ風を感せしめさるを欲するのみならす溫度も甚高からさるが故に高窓及內障子を閉づる等最も注意となせり午后三時頃より稍微風となる依て高窓及內障子を開く仝六時埋火をなし仝七時薄曇となり忽ちにして晴天となる仝時高窓を半閉となし內障子を閉す仝九時よ至りて風全く止み冷氣加る仝十二時に至る迄室內保溫の注意に怠りなし

本日を以て第三齡を終る

第四齡表

項目 / 飼育日數	月日	晴雨	華氏寒暖 室內	室外	蠶量四匁ニ對スル用炭量	給桑時間 前	後	給桑手入	一坪平均給桑量	一日給桑總量	籠數及坪數	用桑名	桑篩目	蟲桑歩
十九	五月十七日	朝晴 晝仝 夕仝	七二、七六、七六	七五、七五、六四	午後六時 五百匁	五、 一、六、九、	午前五時中桑	四匁	二貫八百十六匁	十八籠 白七十六坪	中桑 杢桑 七年木	六分	巾四分 長一寸四分	○
二十	五月十八日	仝晴 仝雨	七三、七七、七五	五九、六八、六六	仝 六百匁	一、五、十、 四、九、十三、	午前一時糠入 仝七時起裏板	四匁	五貫六百三十二匁	廿七籠 白六十四坪	仝	六分	仝	○
二十一	五月十九日	仝晴 仝雨	七二、七六、七二	五五、七四、五九	仝 六百匁	六、十一、 四、九、	○	四匁二分	四貫四百三十五匁二分	仝	仝	七分	仝	○
二十二	五月二十日	仝晴 仝雨	七二、七四、七六	四八、七八、六六	仝 五百匁	一、七、十三、 六、十一、	午前一時糠入 仝八時半中裏拔	四匁八分	七貫八九十一匁二分	卅八籠 白七十二坪	仝	八分	仝	○
二十三	五月二十一日	仝晴 仝雨	七二、七七、七〇	五五、七三、七八	仝 三百匁	五、十、 二、十三、	午前十時糠入 午后四時眠裏拔	五匁	七貫四白四十匁	仝	仝	九分	仝	○
二十四	五月二十二日	仝雨 仝晴 仝曇	七二、七七、七六	六一、七一、六八	仝 四百匁	七、	午前七時止桑	四匁	一貫四百八十八匁	仝	仝	巾四分 長一寸四分		○
平均		○	○	七三、二五、〇 七六、一七三、一 七五、五六五、五	四百八十三匁三分			○	四匁三分 三厘三	五貫二百八十三匁七分三厘	○	○		○

一飼育時間合計　百二十二時間
一眠中時間　三十八時間
一給桑回數合計　二十四回
一桑量合計　二十九貫七百〇二匁四分
一室内寒暖合計　朝四三三度　晝四五七度　夕四五三度
一室外寒暖合計　朝三三六度　晝四三九度　夕三九三度
一炭量合計　二貫九百匁
一眠蠶百頭量　十九匁一分五厘

第四齡

五月十七日〔自掃立十九日目〕

早天冷氣最強し然れども室内へ就眠期なるを以て前夜來專ら保温ょ注意しさるが爲め七十二度を下らしめず拂曉に至り東方の疾風ありて容易に止むの氣色なし午前五時蠶兒を撿するに既ょ概ね起揃ひ蠢動活潑ょして餌桑を求むるの狀と現へす即ち此ょ中桑を與ふ午后五時に至り風漸く止む仝五時半高窓を全開にし廊下内南北障子を取外す〔内障子は本日に至るまでへ之を備へ置きて開閉をなし室内氣候作爲の助となせしが本齡ょ至りては蠶兒も成長し且つ氣候を漸々温暖ょ向ふを以て本日限り之を取外し外障子のみとなす〕仝六時埋火をなす仝七時ょ至り曇天となり且つ外温漸次下降して冷氣を覺ゆるを以て室内其影響を虞れ之れが注意を盡す仝十二時内温七十三度を保てり

五月十八日〔自掃立二十日目〕

朝來曇天東方の和風ありて細雨を催す前夜來濕氣を防禦せんが爲め火力を利用すると稍多かりしを以て室内蒸熱を釀さんとを虞れ午前四時高窓を半開し仝六時ょ至り之れを全開とし續て天井莚中央を剝ぎ室内空氣ゝ交換を求むゝ之れより先き起裏板の準

備として糠入をおし置き給桑二回を終り仝七時起裏拔をなし其坪數前齡の五歩出し
とし二百六十四坪よ擴ぐ正午よ至り降雨甚し室内濕氣の來襲を防ぐ爲め火力を利用
し爲めに内温七十七度を示せり仝五時よ至り雨歇み晴天となる仝六時埋火をなし夜
に入りての取扱前例に仝し

五月十九日（自掃立廿一日目）

朝來晴天なりしか拂曉に至り薄曇となり忽ちにして又晴天となる東北風あり偶々暴
風となる依て北方高窓を閉す日中内外共に温度に激變なし午后五時に至りて風止む
仝六時埋火をなし仝七時天井莚と覆ふ夜に入り冷氣稍强き室内の注意ハ豫て寸時も
油斷なく保温の手段を盡すと前例に仝じ

五月二十日（自掃立廿二日目）

快晴寒冷甚しく外氣四十八度に降る室内前夜來天井莚を蔽ひ炉火の掛灰を薄らぐ等
偏よ保温よ注意したるを以て七十二度を保てり午前一時中裏拔準備の爲め糠入をな
す日中よ至るに從ひ温度上昇の傾あり依て高窓を開き天井莚中央を剝ぎ去り後又炉火

の掛灰を厚ふし氣管を明け二階上欄間を開く等專らこれか注意と怠らず仝七時糠上
第二回の給桑をなし仝八時半中裏拔を行ひ增席して三百七十二坪となす（本齡の中裏
各籠其居並頭數と均一ならしめんが爲め各蠶兒れ頭數を計算しつゝ裏拔を行ひ新よ
一籠に付千頭宛（一坪百頭の割）を配置せり其現在頭數三萬六千二百頭よして之れを蟻
量四匁を四萬頭と見做し起算する時ハ掃立より本日迄に於て二千八百頭廢失に屬したるを見る）正午に至り外温上昇し七十八度に達
す室内ハ兼て清涼よ注意したるが故に七十四度を上らず午后四時頃よ至る迄東方の
和風ありしが仝時より無風となり稍蒸熱の氣味あり即ち其防禦に注意を盡す仝時氣
管を閉ぢ仝六時埋火をなす本日蠶兒ハ已に本齡の成長極度に達し体軀肥大となり眠
期れ遠からざるを見る夜に入り別に異狀なし雨戸及二階欄間等は順次之れを閉す

五月廿一日（自掃立廿三日目）

朝來曇天にして最も靜穩なり廊下左右障子を開き續て内欄間を外づす午前八時より
晴となり仝時に東方和風起る午前十時よ至り蠶兒を撿するに已に一齊に催眠の兆を
現ハし蠶体淡黃色に變じ就眠に迫れるもの一籠中二三を見る依て糠入の好時機方よ
熟せりと認め眠裏拔準備として之れを行ふ以後二回の給桑を終り午后四時休裏拔（ボ

ッチ」擴げをなす仝六時風止み又曇天となり稍蒸鬱の氣味あり卽ち埋火となし以て之か防禦をなす夜よ入り內欄間を箝め廊下障子を半開ます仝十二時內温七十四度を示せり

五月廿二日 （自掃立 廿四日目）

前夜來無風靜穩にして蒸熱れ氣あるを以て之が注意を怠らす午前二時頃より細雨降る仝八時に至り雨歇み稍晴よ向ふ午后四時より又曇となる仝六時埋火をなし仝七時に至り「ボッチ」の乾桑適度を得蠶兒概ね就眠せるを以て玆に止桑を與ふ本日ハ眠中なるを以て室內濕氣の來襲を防ぐに注意火力を用ひたる爲め內温ハ定温を越ゆるに至りしも是れ不得已に出でたるなり

本日を以て第四齡を終る

第五齡表

項目 / 飼育日數	月日	晴雨	華氏寒暖 室內	華氏寒暖 室外	蠶量四匁ニ對スル用炭量	給桑時間 午前	給桑時間 午后	手入	一坪平均給桑量	一日給桑總量	籠數及坪數	用桑名	桑篩目 剉桑步
二十五	五月廿三日	朝曇 晝晴 夕曇	七三 七七 七五	五八 七七 七六	午后六時五百匁	九、		午后九時桑中	七匁	二貫六百〇四匁	卅八籠 三百七十二坪	晩桑 八日市 八年木	枝桑
二十六	五月廿四日	仝曇 仝晴 仝仝	七〇 七六 七六	五三 七四 六八	仝五百匁	六、十一、	四、八、十二、	午后九時起 裏拔	七匁五分	十三貫九百五十匁	仝	仝	仝
二十七	五月廿五日	仝晴 仝仝 仝仝	七二 七六 七七	五二 七六 六八	仝二百匁	五、十、半	三、七、十一、	裏秡一回 糞秡二回	九匁五分	十七貫六百七十匁	仝	仝	仝
二十八	五月廿六日	仝晴 仝仝 仝仝	七四 七七 七七	六二 七七 六七	仝三百匁	四、九、	二、六、十二、	裏秡一回 糞秡三回	十二匁	二十二貫三百二十匁	仝	仝	仝
二十九	五月廿七日	仝晴 仝仝 仝仝	七三 七五 七七	五八 八〇 七三	仝二百匁	四、九、	二、六、十二、	裏秡一回 糞秡三回	十五匁	二十七貫九百匁	仝	仝	仝
三十	五月廿八日	仝晴 仝仝 仝仝	七〇 八二 七七	六二 八五 七二	〇	四、九、	一、五、十、	裏秡一回 糞秡三回	十七匁	三十一貫六百二十匁	仝	仝	仝
三十一	五月廿九日	仝晴 仝仝 仝仝	七二 七八 七九	五九 八四 七四	〇	一、五、十、	三、八、十二、	裏抜一回 糞抜四回 午後六時二步 上簇	十二匁	二十五貫〇五十六匁	仝 三十籠	仝	仝

三十二	五月三十日	仝晴	仝曇	七五七四	七三六九	七二、五、七〇	七七、〇、七〇	二百十二	夕五分	一、六、十、	二、	正午十二時概 上簇 午後四時悉皆上簇	九	夕	八貫三百 七十夕
平均	○	○						○		○		○		十一夕一 分二厘五	十八貫六 白六十三 夕六分

一飼育時間合計　百六十一時間

一給桑回數　三十五回

一桑量合計　百四十九貫四百八十夕

一室内寒暖合計　朝五七七度　晝六一六度　夕六一二度

一室外寒暖合計　朝四七三度　晝六二五度　夕五六八度

一炭量合計　一貫七百夕

一成長極度百頭量　百十一夕八分

第五齡

五月廿三日〔自掃立廿五日目〕

今朝亦曇天なり午前四時蠶兒を撿し未だ就眠せざるものを拾ひ取りて廢棄す其頭數一籠に付十六七頭なりき午前七時頃より稍晴となる仝八時より東方の和風ありしか追々風勢を增す正午に至りて歇む午后五時滿天晴雲蓋ひ來り東方の疾風之れを供ひ恰も驟雨の摸樣なりしが暫時ゝして風歇み雲散す仝六時埋火をなす本日は氣候は稍劇變多きゝ依り室内の注意い寸時も忽せにせず午後九時ゝ至り蠶兒い概ね起揃ひ貪食の狀切なると認む即ち中桑を給與する爲め蠶座上ゝ薄く籾糠を散布し上に茅(チガヤ)網を敷き之れに枝葉を給與す〔其取扱の要前編に詳なり〕〔午后十二時内温七十三度を保持せり〕

五月廿四日〔自掃立廿六日目〕

早天快晴なりしが拂曉に至り稍薄曇となる午前八時高窓を開く仝十時頃より東南の和風あり正午再び晴れ外温上昇の傾あり依て炉火の掛灰を厚ふし火勢を減退せしめ室内の清涼を謀る午后四時給桑し際起裏拔用意として網を敷き之れに給桑す〔茲ゝ於て網二重となる〕

仝六時埋火をなす此時風歇む仝八時網上一回の給桑を終り仝九時上網を取て別籠に移し（此取扱方前編に詳かなり）即ち起裏拔となす夜に入りてより外氣冷涼を催す仝十二時頃に至る迄ハ室内異狀なく依然として定温の上ゑ居れりゑ依て高窓等を閉ざゝず

五月廿五日（自掃立廿七日目）

朝來快晴午前一時頃より外温の下降せるを覺ゆ依て高窓を閉ぢ以て炉火の掛灰を薄くし發温を補ふ午前六時日中炎暑ゑ至るを慮り高窓を全開し内欄間を外し續て炉火の掛灰を厚うし發温を減却せしむ午前七時頃より外温追々上昇に向ふ此時西南の和風ありしが忽ちに東風ゑ變ず仝十時頃に至り風勢稍衰へ十一時頃再び風勢の强きを加ふ然れども外温ハ益上昇す依て東西廊下先の開き戸は日光の對射を避けて交々開閉す此際廊下境障子ハ一尺許に開く午后二時内温最高八十三度に達せり室内ゑ十分清涼を求むるに注意したるも外氣に伴ひ七十七度に至り日沒頃ゑ及ひ漸々下降に向ふ依て廊下先なる開き戸ハ悉く閉ぢ其内なる障子ハ半開となし尙欄間を箝む仝六時埋火をなす夜ゑ入り冷氣の傾きあり依て室内之れか注意を盡して怠らず爲めに七十

十四度を維持せり

本月中裏拔一回糞拔二回を行ふ

五月廿六日（自掃立廿八日目）

本日快晴なりと雖も前日來の暑熱强きか爲め室内蒸熱の虞あり依て高窓及天井廷を閉蓋せず幾分の力火を利用し室内の乾燥空氣の新陳代謝を計る午后四時頃より西方の和風ありしが仝十時に至りて歇む仝時外温の上昇せんとを慮り日光ハ直射を避け南方雨戸一尺五寸明きとして閉す午后一時頃又東風の和風起る仝四時頃雷鳴あり仝時に陰雲群疊降雨を催す依て南方雨戸を開放す暫時ゑして室内ゑ蒸熱と感ず仝六時埋火をなす此際雨降り來り西北の疾風之ゑ伴ふ即ち高窓の北方を閉し又南北雨戸一尺明きゑ閉づる等風濕れ來襲を防く且つ一方にハ蒸熱の籠らんことを恐れ屢々糞拔を行ひ蠶座を清潔ならしめ給桑の時期を加減する等專ら注意を盡して陳氣の排除を計る午后九時雨全く止む仝十一時晴天となる然れど室内ハ防濕の注意を怠らず

五月廿七日（自掃立廿九日目）

朝來晴天西方の和風あり爲めに外氣寒冷なるよ依り午前二時高窓を閉つ然れとども室内定温を下るの虞なし日中に至りなば必ず温度激昇の摸樣あるを以て午前六時高窓を全開し仝七時炉火の灰を厚ふし發温なからしむる等豫め清涼を求むるの用意をなす午前十一時頃より追々上昇に向ふ依て氣管を明け日光の射入せざる二階上欄間を外づす午后二時外温八十二度の高温よ達す室内は豫て之れが注意を行ひたるも八十度に上温す本日は既に蠶兒も生長し給桑量も增加し加ふるよ糞沙の排泄も夥しきのみならず温度高きが故よ棘沙堆積する時ハ蒸熱を釀すの虞あるを以て糞拔の注意は周到あるを勉めたり午后三時頃俄然西南の疾風起る依て南方高窓を閉し續て氣管及二階欄間を閉して之れが來襲を防ぎ風力の減退するを待ち又高窓を開く仝六時埋火を行ふ夜よ入り稍冷氣の傾きあり即ち之が注意を盡す仝十二時内温七十三度を保てり

五月廿八日〔自掃立三十日目〕

前日の如く朝來快晴午前二時室内下温の傾きあり依て廊下左右障子を閉す午前四時

西方和風あり暫時にして止む仝時外温六十二度内温七十度よ下れり依て天井莚を蓋ふ午前六時頃より追々外温上昇に向ふ即ち廊下左右の障子を開き續て日光の直射せざる二階欄間と外つし氣管を明け次きよ南方雨戸一尺明きに閉づる等專ら清涼に注意す日中よ至るに從ひ果して暑熱にして午后二時外氣九十度の高温となり室内ハ八十三度よ昇れり蠶兒發生以來未曾有れ炎暑にして實よ之が防避よ非常の力を盡し糞拔に油斷なく且つ給桑量を加減する等可及的注意をなせり本日蠶兒ハ己に成長極度に達せりと認め午后四時其体量を檢せしに壹頭量平均十一匁一分三厘なりき最早蠶糞も稍柔濕となり蛻熟期の近きを見る仝時よ二階上欄間及氣管を閉ぢ直に南方雨戸を開く日中暑熱の埋火をなさず夜に入り外温下降せるも上氣は定温を下るの患なし

五月廿九日〔自掃立卅一日目〕

早曉稍薄曇となりしが忽ち晴天に復せり本日も亦暑熱の傾きあるを以て豫め之れが注意を怠らざると前日の如し朝來蠶糞ハ愈柔濕となり熟蠶の兆を現す因て特に午前に於て蠶拔一回を增す午后二時に至り蠶籠中點々熟蠶の現ハるヽを見る仝四時頃よ

り熟蠶稍現いるゝを以て豫て準備の簇一籠（縦四尺横三寸二寸）に對し六百頭れ割合を以て宿らしむ（上簇法前編に詳なり）爾後順次拾ひて上簇せしめ午后六時頃に至り全數の二歩通り上簇せり日中暑熱なりしが爲め夜間に至るも格別温度の激降いなかるべきを以て日も埋火をなさず夜に入り薄曇となる仝十二時内温に異狀なし本日い熟蠶期よ接せしを以て糞板の注意い油斷なく之を行へり

五月三十日（自掃立卅二日目）

曉天薄曇早立より熟蠶の現いるべきを以て午前一時給桑を行ひ仝四時裏扱きをす此際より已に熟蠶現出するを見る依て仝七時より急き拾に取りて上簇せしの各籠一順を終り直よ糞拔を行ひて打繰桑をなし再ひ拾ひ集め順次上簇せしむ午前十一時未た熟せずして拾ひ殘りれる蠶兒のみを集め八籠よ減縮す後又順次拾ひ正午十二時に至る迄一二順を經て概子上簇を終る

本日を以て第五齡を終る

自掃立至熟蠶總計

一飼育日數總計	三十二日間
一飼育時間總計	六百二十三時間
一眠中時間總計	百二十四時間
一給桑回數總計	百三十三回
一桑量總計	百九十五貫七百三匁四分九厘
一室内寒暖總計及平均	朝二三〇二度　晝二二四〇二度　夕二三七九度
一室外寒暖總計及平均	朝一八〇一度　晝二二六五度　夕二〇六一度
一炭量總計	朝五六度二　晝七〇度八　夕六四度四　十四貫匁

自上簇至繭搔取日表

日次	項目	月日	晴雨 朝	晴雨 晝夕	華氏寒暖 室外 朝	華氏寒暖 室外 晝夕	華氏寒暖 室外 夕	華氏寒暖 室外 夜	一室用炭量
一		五月廿九日	晴	仝	朝七七二度	晝七七八	夕七七九	仝七七一	○
二		五月三十日	曇	晴	仝七七七	仝七七五	仝七七四	仝七七三	○
三		五月卅一日	晴	仝	仝七七七	仝七七五	仝七七九	仝七七五	午後六時四百匁
四		六月一日	晴	仝	仝七七七	仝七八六	仝七八六	仝七八六	仝五百匁
五		六月二日	晴	仝	仝七八七	仝七八六	仝七八八	仝七八二	○
六		六月三日	曇	仝雨	仝七七七	仝七七六	仝七七六	仝七七四	仝四百匁
七		六月四日	雨	晴曇	仝七七七	仝七八六	仝七八六	仝七八二	○

合計	○	○	朝五〇三度 晝五三八度 夕五四八度	朝四三九度 晝五七一度 夕五一一度	一貫三百匁

一上簇籠數總計　六十二籠

一成繭　石數　一石二斗八升二合八勺

貫數　十五貫百三十七匁〇四分

五月廿九日（上簇當日）

上簇室ハ兩三日前より炭火を用ひ簇ハ既ニ悉く用意して俱に十分の乾燥をなさしめ當日熟蠶の現ハるゝや其都度々々之れを上簇す（上簇法前篇に詳なり）而して上簇室内は明暗不平均ならざるを勉むる爲め南北兩戸を細目ニ閉ぢ置く本日ハ外温非常の高度に達し殊に室内ハ上簇の當日なるを以て高温を忌むか故に屢々水布を用ひて洒拭と行ひ其他高窓欄間氣管等の扱に依り清涼を求むる手段竭さゝる所なし然れと外氣に伴ひ室内亦高温ニ達せり夜ニ入りてハ急激の下降を虞れ徐々に赴かしむ室内ハ能く乾燥し且つ夜間に及ぶも定温を下るの虞なきを以て埋火をなさす

五月三十日（自上簇二日目）

本日熟蠶續々現出す依て午前七時より着手し其都度上簇せしめ正午ニ至るや拾集め僅に三籠を餘すのみ而して午后四時に至り全く終る室内取扱ひ前日に異なる所なし只外温低度なりしと以て氣候作爲ニ於て甚しき手數を要せさりき本日も亦埋火を爲

すの必要なきを認め之を廢す

五月卅一日　〔自上簇三日目〕

午前二時曇天且つ西方の和風ありて外氣下降の傾きあり依て高窓及内欄間東西廊下内の障子等の斟酌を加へしを以て室内適温を保つを得たり曉天に至り好晴となり午前八時風歇む本日ハ上簇の委見尚結繭中なるを以て室内明暗不平均なかしめん爲め南北雨戸一尺五寸明きよ閉ぢ置く仝九時頃より外温上昇し八十四度となり從て室内七十四度を示す即ち勤めて清涼を計る事前例に異ならず午后四時北方の疾風起り仝五時半に至り歇む仝六時豫備の爲め埋火を行ふ夜に入り外温稍冷氣よ傾く依て内温の下降せんとを慮かり豫め欄間及氣管等を閉ざす

六月一日　〔自上簇四日目〕

朝來快晴冷氣にして東方れ和風あり午前八時頃より追々外温上昇よ向ふ室内ハ豫て清涼を求むるれ注意を怠らず本日ハ上簇後四日目にて最早概ね吐絲を了りたるを以て簇に風入と稱し仝時外氣の乾燥せるを見計らひ雨戸及氣管等を全開て室内と

明晰ならしむ仝十時風歇む午后二時外氣れ上昇に伴ふて内温八十一度よ達す爲よ終日勤めて室内空氣の流通を計れり仝六時明曉の冷氣を慮ゥり新よ炭火五百匁を埋む日沒后漸々冷氣を感じ仝九時より西方の微風起る然して内温未だ異狀見ざるも外氣の影響せんとを慮れ氣管を閉す

六月二日　〔自上簇五日目〕

午前一時風歇み仝二時頃より曇天なりしが拂曉よ及んで追々晴れ仝八時頃より東方の和風あり漸次疾風に變ず然ども暑熱殊に甚しく午后二時よ至り外温九十二度に昇る室内ハ豫て清涼を求むるに注意し種々の手段と竭したりと雖ども八十六度よ達し實よ之が防禦よ困難と極めたり仝四時雷鳴あり仝五時に至り雷止み風亦止む然れども蒸熱の氣味あり仝八時頃より薄曇となる時に内温尚高きを以て之が防禦に力を盡せり

六月三日　〔自上簇六日目〕

朝來曇天午前八時より細雨降り仝十時止む午後一時東方疾風起る仝三時よ至りて歇

み暫くよして復細雨降る依て室内雨濕の來襲を虞れ南北雨戸一尺置あに閉ぢ且つ火力を利用し專ら濕氣の排除を計る夜に入り雨尚止まず全六時新に炭火四百匁を增理し以て防濕に備ふ本日は廿九日上簇に係るものゝ既に六日目なるを以て繭掻取の好時期なるに依り掻取を行ひ之れを一籠に付八百匁宛即ち一坪に付百匁の割合を以て蠶籠に並列す

八月四日（自上簇七日目）

本日い三十日上簇のもの即ち六日目にして方に好時機なるを以て繭掻取を行ひ前日の如く蠶籠に並列し明日に至り撰繭を爲し以て殺蛹時期に至るを待つ本日を以て上簇期を終る

木村九藏氏
養蠶傳習所春蠶飼育日表畢

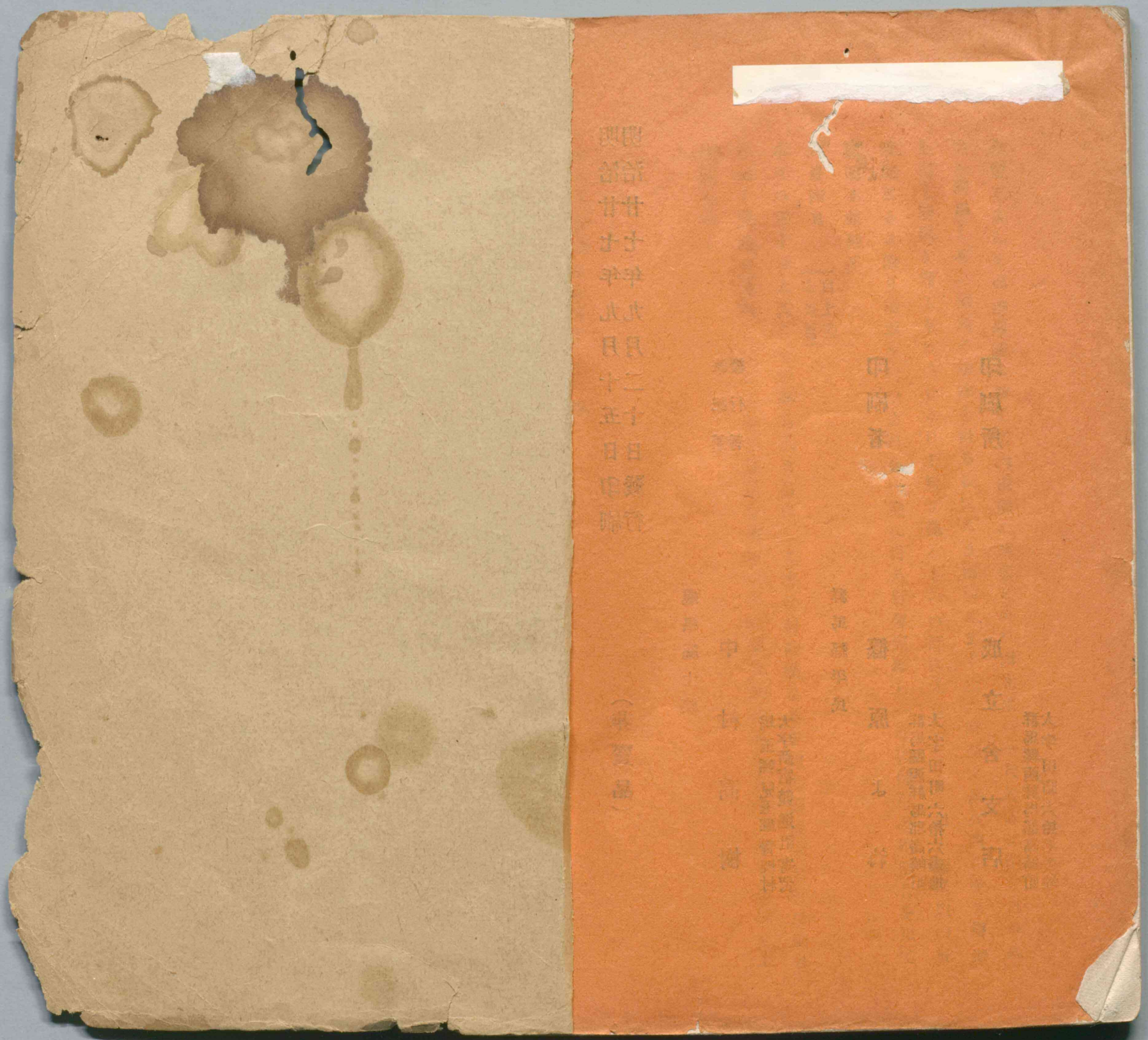
明治廿七年九月十五日印刷
明治廿七年九月二十日發行

（非賣品）

筆記兼發行者　嶋根縣士族　中村高樹
埼玉縣兒玉郡青柳村大字新宿競進社寄留

印刷者　群馬縣平民　篠原よね
群馬縣西群馬郡高崎町大字田町六拾六番地

印刷所　成立舍支店
群馬縣西群馬郡高崎町大字田町六拾七番地



群馬県立図書館
0238148-1
群馬県立
図書館